
IS インフィニット・ストラトス －武装を持たないISと気に入らない目付き－

マイペース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス – 武装を持たないISと氣に入らない日付きー

【Zコード】

Z9822S

【作者名】

マイペース

【あらすじ】

皆さんは思つた事があるはずだ、原作の織斑君の日を見て思つたはづだ。

「これ不良だろ?」と、皆は思わなかつただろうが、俺は思つた。だったら俺は、もしも織斑一夏が、ぷち不良だつたら、どうなるのかを書いてみたかったから、私は書いてみよつと思つただけの、自己満足小説です。

「んなはすじゅ無かつたのこなー···あと『アシガーレットなり

俺には夢がある。

あの人のように格好よく、あの人のように凛々しく、あの人のように強く成りたい。

それが俺の夢だった。

だから、俺は俗に言つ、文武両道」とやらを田指していた。

けど、昔誘拐されたことがある。しかもこの誘拐は被害者が俺だけならば良いものを、あの人、の将来に泥を塗ってしまった。

それから俺は変わった。

あの人には頼らず、強請らず、そして何より心配をかけさせないために···

「俺···強くなれたかな···千冬姉···」

ある街のある路地裏の一角、普通の学生なら近寄りもしない所である。

だけどいいは良いことじゅうだ。

なんたつて――――――

「・・・・」

「・・・・くそつ・・・・イテハ・・・・」

「・・・・オレらが・・・・悪かつたつて・・・・」

――――――なんたつて、外部にばれずに喧嘩が出来るんだからよ――――

その地面には隠りながら悶えている、一般的に不良と呼ばれている男が五人ほど、満身創痍で突つ伏していた。

そして、その不良どもを椅子代わりに座りながら、白い筒見たいな物を口に加えている青年、それが――――――

「てか、今日から学校じゃん……まだ時間は間に合つかな？とか、遅刻したら、千冬姉に怒られるかな？」

―――今作の主人公、織斑一夏である。

「約一名欠けていますが、全員揃つますねー。それじゃあSHRはじめますよー。」

そこは俗に言ひうる学園の中の教室、一年一組の教室である。

そしてこの教室は今日から授業が開始される訳なのだが、まあ、学校が始まる時の恒例かねー、自己紹介が有るのだが、約一名が居ないのであるが、そんな事で授業の一環である自己紹介が無くなるわけも無く。

「では、自己紹介をしてもらいます、出席番号順にお願いしますねー

そう行つたのは、このクラスの副担任、山田真耶、である。

そして順々に自己紹介が終わつていったのだが、ここでストップがかかった。

「——さん、ありがとうございます、では、次に織斑一夏くん……やういえば居ないんでしたね……では、次の「それは、問屋がおひさんせ先生よお……」……」

急に来た来訪者に山田真耶もびっくりしている、クラスの殆どもびっくりしているのだから。

「すいません先生、学校に来る最中に、少しばかり有りました……それで遅れてしましました……」

「はあ、それは良いのですが、織斑君……その、口にくわえてるのは、煙草ですか？それならば、先生として、相応の態度を取らせて貰いますが……」

山田先生はさつきまでのまつたりとした空氣から、すつ、と刃物のよつな鋭い空氣に周りを染め上げた。

クラスの女子達はそんな空氣に触れた事さえ無いのだから、冷や汗が出ているが、そんな空氣をびくともしない一夏は、口にくわえて

る物を手に持つて、三田元見せながら囁く。

「あ、これですか、これはロボットアシガーレットですか？」

「……………<え?」

わざわざの空氣が急速で去っていき、一瞬で壊れになってしまった。

「ニヤー、これ口こくわきてなこと気がすまないんだよ……」

「は、まあ……」

一夏の発言で呆氣とらされた三田を見た――――

「アハハハ、今まで、今ひて血口紹介せつてしましましたよね？俺の番つてもひ過あつござつたか？」

頭を搔きながら申し訳なさうに、三つ一夏――――

「こ、こえ、ひみつビ織斑君の番ですよ?」

「あ、申しますが、三田先生。」

そういうながら一夏は黒板の前にある教壇に腕をつきながら「うつ
つた。

「俺の名前は織斑一夏だ、好きな物は、見てのとおり『コアシガーレット』、将来の夢はまだ無いが、目標はある。それは————」

「！」の先生、織斑千冬を越える！」セ「寝言は寝て言えー！」ヘヴァン

田標を言ひおつとした一夏君を沈没させたのは、出席簿と、織斑一夏の姉、織斑千冬であった。

「んなはすじや無かつたのこなー···ねヒヒタシガーレットなり（後書き）

一夏語のステゴロは、ラウラよじかよじ上位です。

けど、一般不良から見れば無双ですね~~~~~

——諸君、私は統率するのが好きだ——いやいや、あんたは人間かね？（前書き）

とりあえず、投降します・・・投稿します・・・

いやあ、皆さんは、シャルロッ党とか、ブラックラビッ党とかかと思いますが、自分は断然・・・ブラックラビッ党ですはい・・・

・

けど、個人的には千冬さん、好きですけどね、ネットに千冬さんがスカート履いてる画像を見たときから惚れますね？

だって可愛いんだもん？

感想、意見などは勉強に成るのでどんどん下さい。

では、MY PACE WORLD 始まるよ？

——諸君、私は統率するのが好きだ——いやいや、あなたは人間かね？

「流石に弟をヘ、ヴンするのは余りにも残酷すぎでは有りませんか？」

俺の問い合わせに千冬姉は――

「ふん、調子にのつて、生徒に制裁を加えたまでだ・・・」

千冬姉は出席簿で肩で叩きながら呆れた目付きでこいつを見ている。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたんですね？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押しつけてすまなかつな

久しぶりに千冬姉の声を怒号以外に聞いたよつた気がするんだけど
な・・・。

「い、いえつ。副担任ですから、これくらいはないと・・・・・・

弱々しい声は変わらないが、この女性（副担任）は……。しかる
けど……）

だが、その視線には尊敬や憧れを通り越して居るよひつな……。

・・・・・ハツ！？

ワカタギワトソン君……！

「千冬姉……男性が近づかないから……同性に走るのは「貴様
は一度死ね！……！」などおお……！」

俺が言おうとした時に、邪魔しやがつて、いま俺の頭上には振りか
ぶられた出席簿とそれを押されて頑張っている俺のココアシガーレ
ットである。

「ココアシガーレットって意外と堅いんだな……。

ぼきつ……！

「あ、折れた……」「一重の極み……」ヘヴン……！」

・・・・・出席簿つて痛い……。皆も学校に行つたら友達に試
せよ……。

「では、気を取り直して、諸君、私が織斑千冬だ。君たちには一年で使い物になるまで育てるのが仕事だ」

ふうん、千冬姉って数年前から「こんなことしてたんだ……

「私の言つことはよく聞き、よく理解しろ。私の仕事は若干十五才の十六才に鍛えぬく」とだ。逆らつても良いが私の言つことは聞け、良いな」

なんだか、戦争が大好きな大佐殿の演説みたいだな。

時が時なら、千冬姉は国を背負つてただろうな・・・

「キャ　　！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さんのためなら死ねます！」

「イエス・ゴア・ハイネス！」

・・・・何これ怖い？

女子校では同性に走りだすような奴が居るのは都市伝説見たいなん
で知つてたけど、本当にあるとは……いやはや怖い怖い……

まあ、実際俺と喧嘩した不良を統率してパシリにしたり、パシリに
したり、パシリにしたり……成れの果てには、

「 「 「 「 姐御と兄貴、『無沙汰します!……』」「」」

とか言わながら中学校に行つた記憶がある……

「あれ？織斑君って……まさかあの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、それが関係して男なのにTTS使えるのかー？」

「良いなあー、変わつて欲しいなあ……」

・・・・・・・・まだよ・・・・・

皆、『織斑一夏』をみずくに、『織斑千冬』の、弟の『織斑一夏』を見
やがつてやがる・・・・・

「織斑、落ち着け・・・・・それに貴様等もだ少しは静かに出来な
いのか……」

千冬姉が最初は咳くように俺に言い、忠告の方は威厳バリバリの声量で言い放つた。

「…………すいません、千冬ね……織斑先生……」

なんだか名前を言つたら殺されそつだったので、先生として呼んだ。そこでチャイムが鳴つた。

「おまえは昔からこうされるのが嫌いだつたからな……さあ、SHRは終わりだ。これから基礎知識を半月で覚えもう。その後自習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。」

クラスの女子の大半が千冬姉に尊敬の眼差しを送つてている。

やれやれ、昔から思つてはいたが女子は不良よか怖いな……統率すると手に付けられないからな……

「いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

本当にウチの姉は人間かね?何で言つか、上から物を言つのが上手いと言つか、人の上に立つのが上手いと言つか……これだけの人心掌握術だけでも、異常、なのに、腕の方も、異常、だから怖いんだよな。

「…………イエス・ヨア・ハイネス!……」「…………

・・・なんと無駄に洗練された、無駄の無い、無駄な発言だらつ・・

——諸君、私は統率するのが好きだ——いやいや、あなたは人間かね？（後書き）

なんだか、千冬さんがめだかボックスの世界に行つたら、即13組に入るだろうな・・・

てか、めだかボックスのめだかとマジ恋の百代がかぶるんだよねえ？
では、待ったね？

幼なじみと「ハシテブーつてか？ 努力？したから良いんだよ

「ええい！－－－貴様は見ない間にそんなに不良見たく為つたのだ！」

！－－！」

「いじつちにも色々有つたんだよ－－－！」

今起じつている事を話すぜ・・・・・

田の前に可愛い顔をした女の子、幼なじみがいる。

女の子なんてちゃちなもんじゃねえ・・・そこには般若のような形相をしてる鬼が木刀を型に填まつた振り方をしている幼なじみ、篠ノ之箇、が居「考え方をしてる暇があるのか一夏よ－－－！」

ぶん！－－！

ヒヨイツと・・・

「当たつたら痛いだろ？が！－－！」

「ええい、貴様なら当たらないだろ？が！－－！」

そう激昂すると筈は某無双ゲーのよつて木刀を振り回してきた。

「・・・不幸だ・・・」

事の発端はS H Rが終わった時、後ろから声をかけられて振り向いてみると、昔と変わらない、筈、がいて、廊下に呼ばれたのは良いのだが沈黙状態が続き、耐え切れなくなり話題を提示した。

「そりいや、筈、去年、剣道全国大会で優勝したよな?おめでとう」

「・・・なんでそんなこと知ってるんだ」

「いや、千冬姉に言われて新聞読むのが習慣に為つてたからな?」

「な、なんだと・・・」

筈は驚いたような顔に為つていた。

・・・・けど、あれ?

確かあの新聞は家じやなくて・・・

「・・・・あ!思い出した!」

「ど、どひしたのだ・・・いきなり大きな声を出して」

「いやあ、その新聞呼んだのって何処だつたか忘れててな、今思い出したんだ……いやあ懐かしいな……」

「ほ、ほへ、してどりでよんだのだ？」

筈は気になるのか田を少しだけ輝かせてこいつを見ている。

まあ、自分の事だしな、気になるのも仕方がないよな――

「こやあ～、本当に懐かしこよ……喧嘩し終わつて帰る途中に拾つたんだつた」

「…………ほつ？」

筈はあきれたよつた顔をしてくる。

「あの時は本当にヤバかったもんな……だつて15 VS 1で勝つたもんな……」

「…………い、一夏よ……せ、貴様は……」

ブルブルと震えてるが筈はどうしたんだ？

・・・・あ、あれ？何でさっさとまで持つて無かつたのに木刀なんか持つてるのかなあ？

「あ、あの～、幕さん？」

恐る恐る幕に向つて見たもの――――

「貴様と申す奴は――――――――」

“触りぬ神に祟り無し”とは昔の人によく言つたもんだよ？

それで、畠頭まで戻るかな？

え？剣劇は終了したよ？

なぜかって、それは始業のチャイムが鳴ったから幕から――――

「とにかく後で説教だからな――――」ううい・・・・・爵だよ・・・・・

「…………あるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ」

どいつも、織斑一夏です。

今現在授業でやつてるのはISの動かし方ではなく、取り扱い説明みたいな物である。

正直退屈だなあ・・・

自慢では無いが俺は勉強は出来る方だから自習と予習だけことで足りたからな、授業なんて聞いてなかつたから（だから、中学でも寝てて不良つて言われてたんだけどな・・・）。

今の授業もこの学園に来る前に参考書を、暗記、と、理解、は終わつてゐるから聞く意味なんて無いんだよなあ・・・

机の上にある教科書も読んでみたが、参考書の用語のパズルだった

り、応用だつたりしてるので真面目に授業を受けなくても、テストでは80点台は固いと思うぞ？」

「織斑くん、何かわからないとこありますか？」

山田先生が俺に問い合わせてきた。

確かに今の俺の姿勢は机に突っ伏している状態だから、もしかしたら“解らない”のかなー、てな推測が立つても無理はないだろう？

「いえ、無問題です。」

俺は顔を上げて山田先生の目を見ながら言つた。

「で、ですが、顔を伏せていたので解らないのかと・・・」

「山田先生、あいつ・・・織斑はそういうのは大丈夫ですから無視しても大丈夫ですよ・・・」

おどおどし始める山田先生と「またか・・・」みたいな目を送つてくる千冬姉。

「織斑は私が昔に、少しだけ、勉強のやり方を教えてやつたからな、その所為で、暗記、と、理解、に長けているからな」

「あ、暗記は解りますけど、理解って、『理解する』の、理解でいいんですか？」

「じや顔をしてくる千冬姉と頭にクエスチョンマークを作っている山田先生。

確かに昔に千冬姉に、少しだけ、といつなの、地獄、の勉強会の所為でそこいら辺スペックは上がったのだが……

「織斑先生よ、小学生に向かつて罵声と暴力を訴えかけながら、石畳を抱かせつつ、部屋の酸素を4分の1にして1ヶ月する勉強会が、少しだけ、と嘘つのなら、俺は神だろつと殺してやる……」

あの時は死ぬかと思った……そういうばあの時から『アシガーレット』食い始めたな。

ストレスの捌け口がまさか『アシガーレット』とはな……

「え、織斑先生、そ、そんな事してたんですか！？」

PART-1を聞いて山田先生はビックリしているようだ。

クラスの女子も皆動搖してる……なぜなら……

「む、そなだがなにか問題でもあつたか？」

その勉強法が、当たり前、だと思つてゐるのだから

タカヒーとは誰の事ですか？ 姿見をみるオルロッ党（前書き）

連日投稿なつ！

ではでは今から私はジャンプとめだかボックスの単行本を買いにでも行つてきますさかい（＝・・）／

感想とか意見等も気軽に書いていくください（。・・。）

では、MY PACE WORLD 始まりかな？

タカビーとは誰の事ですか？ 姿見をみるオルコッ党

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

二時間目の休み時間、俺は授業中に吸え・・・食べれなかつたココ
アシガーレットをくわえて休み時間を謳歌しようとしていたら誰か
が話し掛けてきた。

話し掛けってきた相手は日本人ぽくない肌の白さと、目の色がブルー
だから多分英國辺りから来た生徒だろう。

そして彼女から感じる高貴なオーラを見るかぎり彼女も、今時、の
女子なんだろう。

今の世の中は、IS、が使える それが国家の軍事力になる だか
らIS操縦者はえらい そしてIS操縦者は俺を除いて女しか居な
い。

だから世の中の女性は男を奴隸か労働力としか見ていない。
実際街中ですれ違った女の子にパシられてる男を見るなんて『うこ
ある（まあ、その場合俺は睨み付けて終わるんだけどな・・・）。

「訊いてます？お返事は？」

「ハイハイ聞いてますよ、で何？」

「ココア・シガーレットをくわえてるときに来やがつて・・・」
「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しがれただけ
でも光栄なのですから、それ相応の態度といつものがあるんではな
いかしら？」

「残念ながら初対面の奴にそんな態度でエンカウントをしようとして
る奴にしてやれる態度なんか持ち合わせてないんでな」

全く、初対面の奴に良い印象を与えると思わないのかね？

「わたくしを知らない？」このセシリ亞・オルコットを？イギリスの
代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

セシリ亞やね～、多分自己紹介の時には千冬姉にヘブンされてたから
氣失つてたからな～

けど・・・・。

「それ言つなら俺も入試全教科満点だし、日本の、暫定、代表生だ
ぞ？」

「な、入試主席なのは私だと聞きましたのに、それに、暫定、代表生で事も聞いてませんわよ！」

「あ～、あれじゃね？、女子だけって、オチじゃね？」

「つ、つまり、私だけでは無いと……で、では、わたくしは入試で唯一教官を倒しましたがあなたはどうですの！？」

なんだか声のボリュームがでかくなってきたなあ、周りが騒つき始めたぞ？

「入試って、あれか？ISを動かして戦うつてやつ？」

「それ以外に在りませんわ」

「あれなら～・・・負けたな・・・」

「ほら見なさいな！やはりわたしの方があなたよか上に居ますのよー！」

オルコットが胸を張りながらこちらを見下ろしている。

だけどあの時は・・・・

「まあ、仕方ないんじゃね？あの時は、専用機、貰つて田も浅かつたし」

そういうながら俺は腕に着いている待機中の俺の、IS、を見せる。

「おや、あなたも専用機を持ったの？ならもうと酷いのではありますか？専用機持ちが配給用EHSを使う教官」ときに負けるなんて同じ専用機持ちとして恥ずかしいですわ」

「いやー、あの時の試験官って……ってあれ？誰だつたけな……確かに自分で、ドイツ、代表って言つてたけどな……」

「……あ、あなた、代表生と戦いましたのー？」

「落ち着け、糖分が足りないのか？」

「ココロシガーレットをちりつかせてみる。」

「い、これが落ち着いていられ

キーンコーンカーンコーン。

おつと二時間目の始業のチャイムだ。

「つ……また後で来ますわ！逃げなことねーよくつてー！？」

そのままオルコットは自席に戻つていった。

おれ？そつとかからずつと席に座りっぱだよ。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

さつきまでの授業とは違い、山田先生ではなく千冬姉が教壇に立っている。

山田先生まで教室の隅でノート取つてゐるし・・・

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への主席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今のじてんでたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

まあ、簡単に言うと、クラスの代表、てな訳だな・・・何だか嫌な予感がしてきたな・・・

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

・・・・ほり来たよ・・・

「私もそれが良いと思います」

クラスの女子が次々にそいつっていく。

まあ、世界で唯一 IRS を使える男、が、クラス代表、だつたらネームバリューがあるわな・・・

「では候補者は織斑一夏・・・他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「・・・・不幸だ・・・・」

はあ、この手のはあらがわず、流れに身を任せてればいうんだよ。

「待つてくださいー納得が行きませんわ！」

机を叩いて立ち上がったのはオルコットだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

なんだか、本当にあれだな・・・ムカつくな・・・

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！私はこのような島国まで IRS 技術の修練に来ているのであって、サークスをする気は毛頭ございませんわ！」

「いいですか！？クラス代表「ザクザクザクッザクッザクッツ
！」

オルコットは驚いている。

それもそのはず、なんたってオルコットの机には十数本の「ココアシ
ガーレット」が机に、刺さっているんだから、そして俺はオルコット
の席に近づき、

ドンッ！！

机を踵落としてたたき割り。

「テメエ、自分が氣に入らないからってこの国バカにしてんじゃね
えぞ」「う？」

「なつーー？」

「テメエの国もいつまでも、貴族、なんつうもんに捕われてるだろ
うが英國風情が。」

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますのーー？」

「これは侮辱じゃない、紛れもない現実だよ、^{リアル}戦争処女。そんな言
葉は薬莢の匂いを染み付かせて、ハンマー音を覚えてから言つんだ
な？」

「決闘ですわ！」

女性は絶対無敵最強なんだよつ！ 底辺を知らないエロ共がつ！ （前書き）

自分T.Sの世界の、女性、が強いのだら？の思想が嫌いなので書いてみました。

それよか、今週号のジャンプの球磨川がかっこよさぐる（＝・・・）

ではでは、MY PLACE WORLD はじめたいです？

女性は絶対無敵最強なんだよー！ 底辺を知らないエロ共がつ！

バンッと机を叩くオルコット。

「ああ、別に良いぜえ、だけど殺さない、程度、の真剣勝負ならテメエよか場数は踏んでるぜ？」

「そう？ 流石は極東の猿さんですわね。何にせよよりどり良いですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリ亞・オルコットの実力を示すまたとない機械ですわね！」

「どうでも良いがハンデはどうひつけん？』

「あら、早速お願いかしら？」

「ちげえー、俺がハンデ付けるんだよ？ どうする、右手しか使わなくするか？ 田隠しするか？」

その位は普通に有ったからなー・・・強くなろうと思つてたら国まで出たからな・・・

―――クスクスツ！

クラスの女子達がクスクス笑いから段々と爆笑に為つていった

「お、織斑くん、それ本氣でいつてるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにエヒ使えるかもしれないけど、それは言ひすぎよ」

みんなが本氣で笑っている。

千冬姉は呆れている、まだまだ、人間として、思考、出来てない使い用の無い女子（兵士）にたいして・・・仕方ない。

「すまんがそこの娘」

「え？私のこと？・・・クスツ」

俺はすぐそこにいた女子に話掛けた。

その子もさつきの話題で笑っていた。

「君は、男が強いと思うか？それとも女が強いと思うか？」

「そんなの当たり前に女性が強いに決まってるじゃん！…そんなの当たり前じゃん！」

女の子は当たり前のようじらりと返事をした。

「では、質問を変えるよ、君、は、俺、より強いのか？」

「それは織斑くんはISH使えるかもだけど、やつぱり女性の私がつよ「ザクッザクッザクッザクッザクッ」…………」

俺はさつきオルコットにやつたよつて、机に、モノ、を突き刺した。

だが、さつきと同じ「ロアシガーレットではなく、「ンバス、やら、三角定規、やら、彫刻刀、やら、シャーペン、やらと、文房具が刺さっていた。

「…君、は、俺、よか強いのだろ？…だったら俺のやる攻撃なんか気に掛からない些細なものだろ？」

「……ば、バカじゃないの……さつきのは現実的じゃなくてISHを使ったならの話で……」

「だったら、ISHを使えたなら、俺、に勝てるのか？」

「そんなの当たり前じゃない！」

「この女の子は解っていないなあ。

「じゃあ、話題を変えよう。君は街中で会った男をパシリに使った事があるか？」

「そんなのあるに決まってるじゃない？」

「ならそのパシリに使った男が不良でもしも、仕返しとして仲間を呼んであんたを路地裏に連れていったら……貴様はそうなつてもまだそんな事言えるのか？」

「や、そんな」とあるわけが「あるから言つてるんだよ」なつー？

「大体はそうなる前に女の子が助けを呼んで不良が逃げたりするが、そうなつた女の子は心に多少なりとも傷を作っているんだよ」

「…………」

女の子は俺の話を真剣に聞いていた

クラスの女子も同じように聞いていた。

「つまりだ、おまえら、女性が強いんじゃねえ、テメエ等を包んでるエス（鳥かご）が強いだけなんだよ、そこを勘違いしちゃいけ

ねえんだよ・・・・・

「…………」「めさん……織斑くんに言われるまで気付かなかつたよ・・・・・」

女の子はこれまでパシリに使つた男の顔を思ひ出して申しぐなさそうに言つた。

「解つてくれたなら良いよ・・・・・おまえらも解つてくれ・・・・・」

クラスの女子達も皆が同じよつて顔を下にして俯いている。

「それとオルコ芝、ハンデの件だが決まつたよ、俺はお前との喧嘩では・・・・・・ブーストを使わないよ・・・・・」

「……そんな事をしては飛べないのでなくて!-!-?」

流石に、軽すぎ、たかなあ?

千冬姉に、特訓とか言されてドイツ軍の訓練を受けられたり、ドイツ軍の方々と喧嘩させられたからなあ。

そのときは田舎じさせられたり、ナイフに向かつて木刀で行かされたり、銃相手に素手で挑まされたりと・・・・・それよかまだマシだよ。

「さて、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておへよひ。そして織斑はブーストの使用を禁止する。それでは授業を始める。・・・・・それと織斑が言つた言葉は本当の事だ。お前等も心にしまつておけ。」

そう言いに千冬姉は微妙な空気な状態で授業を始めた。

あ、シャーペンとかわしつぱだつた！

女性は絶対無敵最強なんだよっ！　底辺を知らないＶＥＰ共がっ！　（後書き）

やつてしまつた感が否めない話でした。

感想などお待ちしますよ？

踊りなさい、わたくしが奏でる狂舞曲でー 鎮魂歌の間違いだり? (前書き)

すこませんでした。

連日投稿をストップさせてしましましたねーーー

多分、今日中には後もつ一話上げられるかな?

では、感想などお待ちしていますよ?

では、MY PLACE WORLD 始業しますよ?

踊りなさい、わたくしが奏でる円舞曲でー 鎮魂歌の間違いだ？

そしてあれから一週間がたつた月曜日。

え？ その一週間何があった？

篠と部屋が同じで殺されかけたり、篠に剣道所に連れて行かれて木刀VS素手をやらされたり、千冬姉に「負けたら・・・わかつているな？」イエス・ヨア・ハイネス！ とそんだけだったでのゾンビ・クリムゾンさせてもらいました。「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

大切なことだからって三度もよばんでも・・・

第三アリーナ・アップル駆け足できたのはおなじみ副担任の山田先生である。

「山田先生、落ち着いて落ち着いて、ココアシガーレットあげますから・・・」

「ハアハア・・・ありがとひびきります」

山田先生は呼吸を正して俺が上げたココアシガーレット食べていく

い。

「ポリポリ……あ、これいけるかも?」

「わつですね山田先生、これつまつですよー。」

俺は山田先生の手を取りつつ言った。

「女性の体を勝手に触るものではないぞ、馬鹿者」

後ろから掛けられた声と風きり音、多分風きり音は出席簿の音だろう、だが甘いぞ千冬姉!

俺は上から来る出席簿を「ココアシガーレットで受け止める。

「甘いぞ千冬姉! そんな攻撃じゃ、織斑先生と呼べ。ゴスンつーーーー! ハズンーーー!」

は、謀つたな……慢心してる最中に延髄殴るつて……

「学園じゅ。そもそもばまたドイツ軍の演習に参加させるだ?」「うー、ドイツでもそんなんだったから結婚出来ないんだよ?」

俺は背中を擦りながら皮肉氣味に言つてみた。

「ふん。馬鹿な弟にかける手間隙がなくなれば、見合いでも結婚でめすぐできるさ」

「そ、そそれでですねっ！織斑くん、用意は出来ましたか？」

山田は言ひにくそうな顔で俺に行つて来た。

「大丈夫です、いつでもいけます。それに俺は一人を待つてたんですけどから」

「なら心配ないな織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。」

「解りましたよ・・・」

「ちなみに、もしもあんな戦争処女バージンの小娘なんかに負けてみろ？・・・

・・・わかってるな？」

イエス・ニア・ハイネス！-!-!

「では行つてまいります！・・・白式！」

右手首についているブレスレットをつかみエスを展開する。

ピカッ！

一瞬の光が生じ、光が治まつたところには一次移行まで終了した俺のエス、白式が展開されていた。

（やっぱり、エス付けると五感が冴えるなあ）

解像度を一気にあげたかのようなクリアーナ感覚が視界を中心にひろがっていく。

（不良との喧嘩の時にハイパーセンサーだけ使つたら一発も食らわずに終了だらうな・・・）

戦闘待機状態のエスを感じ。操縦者セシリヤ・オルコット。エスネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備あり。

「エスのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「心配してくれてるんだな、千冬姉・・・」

「ふん、馬鹿者。不良に為つたとはいえ私が育てたのだ、心配などせん」

「これまた重圧をかけてくれるねえ？もしも勝てたら久しぶりにボトフでも帰つて作るよ？」

「――夏のボトフはいいからな、楽しみにしてくんだ？」

千冬姉、ヨダレが垂れてるよ。ちなみに作るんだつたらボトフよか肉じゃがの方が『』かつたりするんだな？

「ああ、・・・簿」

「な、なんだ？」

そつかからそわそわしている簿に――――――

「行つて来る。」

「あ・・・・・ああ。勝つてこ。」

なんだかこうこうの良いな。やつ思いながら俺はピット・ゲートで進む。

・・・・てか、あれ？

「千冬姉？」

「なんだ？早く行つて早く帰つてきてポトフを作れ……じゅる」

千冬姉はまだヨダレを少し垂らしていた。

「ブースト無しでビザビアで飛ぶの？」

「そんなもの簡単だろ……床を、殴れば、簡単な事だろ？」

ああ、成る程ね、つまりスクライドのカズマみたいに地面を殴れと、しゃあ無いな……

「じゃあ歯をん何かにしがみ付いてください。」

そうこうと簫、千冬姉、山田先生は散開して壁や支柱にしがみ付いた。

「よし、じゃあやりますか……衝撃のファーストブリット……！」

叫びつつ床を殴り付けるとその勢いで外へ飛び出た。

「あら、逃げずに来ましたのね

俺は地面に着地すると腰に手を当てたポーズが様になつてゐるセシリアがいた。

「最後のチャンスをあげますわ」

右手の人差し指を俺に向けている。左手にはゆうに一メートルを超す長大な銃器 六七口径特殊レーザーライフル《スタートライトMK》は銃口は下がつたままだ。

「そんなもんあるのかい？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなれば、今ここで謝るといつのなら、許してあげないこともなくつてよ」

警戒、敵I-S操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティーのロック解除を確認

なんだよ、戦う気満々じゃん・・・

「残念ながら、意地があるんでね、男の子には・・・

「そう? 残念ですわ。それなら

警告! 敵I-S射撃態勢に移行。トリガー確認、初弾工ネルギー装填。

「お別れですわね！」

オルコットは銃口をこちらに向けてトリガーを引いた。

トリガーを引くところまで見えるとは恐るべしハイパーセンサー・

・

キュインツ！

独特の音を出しながら出てきたビームを俺は・・・・・

「―――邪魔だ―――」

右ストレートで殴り発散させた。

そんな機体がありますのー? 少し折れて来い、それから飯でも食え! (前)

なんとか間に合つた!...!

いやあ、すいません、BOOK・OFFに行ってニア・ギア見てたら
時間が・・・

まあ、今回の話で一夏くんのHSの能力とタイトルの意味がわかり
ます。

まだ作者として未熟者ですので、『指摘、感想がありましたら』
軽に書いていてください。

では、MY PACE WORLD 開幕です。

そんな機体がありますのー？ 少し折れて来い、それから飯でも食え！

オルコットは俺がビームをただの、右ストレート、でかき消した事に驚愕しているよう口をぽかーんと開いている。

「びつしたオルコット、鳩が88//コ《アハトアハト》食らつたみたいに顔してるぜ？」

「あ、あなたのISに常識はあります！？ わたくしのビームを殴つてかき消すなんて聞いたことも有りませんわ！！」

やつぱり、それか・・・

「それなら、戦つてたら解るぞ・・・」

俺は左手で腰をつき、右手で手招きをして、挑発をしてみる。

「くつ、そんなにボロボロにまけたいのですね、ならば踊りなさい。わたくし、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲でー！」

セシリ亞は持つていてる《スターライトコト》と周りに飛んでいる自立型ゲーム兵器（ブルー・ティアーズ）で、多角的な攻撃を展開してき

た。・・・・・だけど・・・・

俺はボクシングのヒットマンスタイルに態勢を変え――

「殺、め、る、の、事、だ、よ、う、だ、」

パンパンパンツ！！！

「ジャブの要領で」ひとつむかってきていのページを、打ち消していく

丁度一十発ほど打ち消した所で俺のISに変化があった。

それは右肩の方からオレンジ色の機械チックな羽が一本程生えてきたのである。

「ぐう～ーあなたはせつめから何なんですかー!? わたしのペーパーを武装無しで消すなんぞ、そのペーパーは何なんですかー?」

そうだな、一本も生えてきたしそろそろネタバレしても良いかな？

「」の白式にはな・・・基本装備が無いんだよ」

「！－！－！－！そ、装備が無いISなんて聞いたことも無いですわよ

!

「その代わりに武装用に空いた空き要領にある能力が付加できたら
だ。」

「う、実はこの由式を作ったのは何を隠すあの束姉なのである。

本当は日本の企業が最先端の技術で作ってくれるはずだったのに、
束姉が。

「いーくんの工房は私が作るんだよー。」

といい、その企業にあつたコアを盗みだし作ってくれたのだ。

自分で作れば良いのに盗んだのは、「めんどくさいから」らしい・

・

「本当は装備が入るらしかつたんだけどな、俺はステ「ロの方が強
かつたから要らなくなつたから、束姉が入れた能力、それはな・・・
・」

「エネルギーを吸収する、ただそれだけだ。」

「…………」

流石にオルコットも驚いてるな。

「だけど流石にそんなチート能力はスロットを喰う量も半端じゃないんでな、右手首上からしか効き目が無いのが痛いんだけどな・・・」

「

「・・・・・・・・・・・・

「そして、その吸収したエネルギーは自分で使える、それがこの羽な

俺は右肩から生えているオレンジ色の羽を指差しながら言った。

「・・・・・そ、そんな機体がありますのー!」

久しぶりに口を開いたと思つたら苦情であった。

「あらんだから仕方ねえだろ?、それなり、見せてやるよ

俺は右拳を引いて溜め、殴る準備をすると、

「な、なら貴方の右手が間に合わない時間差で撃てば……。」

オルコットはスター・ライトとビックト4機をフルに使い、時間差を付けながらビームを打つてきた。

「『じめん、そんなの対策済みだから』

ズドーン！――！

わざと逃げていた右手で地面を殴り、その衝撃で空に飛び出した。

だけどその速度は音速の域まで行き、オルコットが反応出来ない速度でビックトに近づき掴み取るとそれを――――

「せえーの、そこやあああああ――――！」

振りかぶったビックトの方に投げると、

ドォン――コーンドォン――コーン――――！

ピンボールをながらに連続して当たつてこそ四機すべてのビックトは落ちていった。

「な、そ、そんなの有りですかーー？」

スタッフ

俺は地面に着地し、右肩の羽を一つ昇華する。

「オルコット、そろそろ行くぞ、俺の必殺技PART1」

俺はまた右手を引いて溜めを開始する。

そして俺は地面を、蹴った。

ただそれだけの事なのだが、その勢いは凄かった、それこそブーストを使っているのでは無いかといつぶらい。

そう、肩から生えているオレンジ色の羽は言わずも一時的なドーピングのようなものである。

そのまま俺は横に回転しながらオルコットとの距離が後少しあとくぐりこになつた時に——

「かかりましたわ

いや、ヒ。オルコットが笑うのが見えた。

「おおいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよー。」

わざまでのビームを打つタイプではなく、これは『ミサイル弾道型』だ。

関係ないんだよ……！

「衝撃の……ファーストブリット……！」

ミサイルが発射された瞬間に回転を止め、右ストレートをかます。

ただそれだけだ。

俺には武器と言える物は無いが、『武器』ならある。

俺はいつだって、木刀相手だって改造工アガンにだって、警棒にだつて、この拳一つで勝ってきたんだ！！！

「これが俺の血漫の拳だ！……！」

ドガアアアアン！！

赤を越えて白い、その爆発と光に包まれた。

「一夏つ・・・・・・・・」

モニターを見つめていた筈は、思わず声を上げた。

「ふん・・・・・終わったな、まあ、一度は折れたほうが今後の為か・
・・・やれ、一夏」

千冬はわかったかのようにモニターを見ながらにじけていた。

「か、勝ちましたのわたくしは・・・」

まだ、煙が舞つているアリーナでセシリアは肩で息をしながらその煙を見ていた。

「まあ、予想外ではありましたが面田は保てましたわね・・・・

そう言ひとセシリアは安堵のため息を一回した。

「オオオーン！――！」

「―――な、なんですかー？」

いきなり煙が晴れ、煙が渦を巻いている。

その渦の中心には――――

「殲滅の――――セカンドブリッジ――――」

回転をしている白式、織斑一夏がいた。

肩の羽は一本も無くなっていた。

『ディユウウン——

一夏は今度は空氣を殴つて、セシリアに向かっていった。

「そ、そんな事が！ わたくしが、このセシリア・オルコットが男なんかに負ける訳には行きませんの……！」

オルコットは無我夢中にこちらでスター・ライト博士を向けたがもう遅い。

もう俺の手の届く範囲、つまり俺のテリトリー。

「一辺、折れて来い、折れなかつたらまた折つてやる、もしも折れたら・・・・・ポトフでも食わしてやるよ。」

そして、俺の右ストレート、セカンドブリット、はオルコットに当たり、ブルー・ティアーズの『絶対防衛』が発動し、エネルギー切れとなつたブルー・ティアーズ、つまり

これにてクラス代表決定戦は俺の勝利をで幕を閉じた。

そんな機体がありますのー? 少し折れて来い、それから飯でも食え! — (後)

流石にやりすぎたかな?

ネタは、「幻想殺し」と「シェルブリット」なんですけど、駄目ですかね?

自分的には肉弾戦をやってもらいたくてこの能力にしたんですけどね?

法律美容外科 オルゴナイト、その鼻歌やめーー（前書き）

早く原作の一巻位に行きたいですけど、やつと一巻なんですよね・・

今回の話は半分位が原作引用なのであまり面白ことは言えないですが、それでも良いと言う方は見ていくください。

感想や、意見や、気軽に書いていいください。

では、MY PACE WORLD 初めてです。

法律美容外科 オルゴシト、その鼻歌やめい！

「武装無しでよく頑張ったな、それでこそその我が弟だ。」

試合が終わってピットの方に戻つてみると千冬姉に簾、山田先生がいた。

「一夏よー？そのヒヒはあの人がつくったのか！？」

簾がこっちに詰め寄りながら聞いてくる。

「あ、ああ、俺が試験を受ける前にあつたから・・・丁度一ヶ月位前に有つたとき、この白式渡されたんだ。」

手首に付いている待機中のヒヒを見せながら言った。

「そ、そつか・・・（あの女狐・・・いや、女兎め）その時あの人は何か言つてきたか？」

「そりだな、強いて言つなら「いつくんひつさしぶりだねー・結婚しようよおー！」って言われたのが一番印象的だったな

「…………力チャヤ」「

あ、あれ、何だらうこの空気……それに筈なんて木刀をいつの間にか持てるし、しかも千冬姉まで……って!? 千冬姉！？それって真剣じや！

「一夏よ……暫く会わない内にそこまでいやらしく為つてしまつたか……」

簞さん、怖いですよ……

「ほひ、私の幼なじみがそんな事を言つたか……良かつたじやないか馬鹿弟よ……」

千冬姉、棒読みも怖いしそれに、何故に一人とも笑顔……！

「おや篠ノズ、思つとことは同じようだな

「ええ、織斑先生、そこで一つ提案があるのでですが……」

田があわせながらにやけている一人が何だか怖い。

「今日の試合は意外と早くに終わってしまいましたので」「はー

私たちが一夏に暴り……稽古を振るつてあげませんか？」

今暴力つて言い掛けたよね！？

「それは良い提案だな篠ノ之、それに木刀じゃやりづらいだらう。これをやうう！」

千冬姉は、なぜか、持っていたもう一本の方の真剣を篠に貸した。

「か銃刀法違反なんじや！？」

「「やあ、一夏よ……遊ぼう、か……」」

「ま、待ってくれ千冬姉に篠よ、俺たちには口がある、言語がある、そして心がある……やめないか？」

「「ううんー止めない！……」」

二人とも綺麗な笑顔で言わないでくれないか……

真剣の光の方が綺麗なんだけどな！……！

その日は日暮れまでリアル鬼ごっこが開催されていた

サアアアア・・・・・。

シャワーから熱めのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れしていく。

白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちょっとした自慢だ。

胸は同じ年の白人女子に比べると幾分慎ましやかはあるが、それが全身のシルエットラインを整えている要因でもあるので本人としては複雑な心境らしい。しかしそれも白人女子と限定すればの話であって、日本人女子と比較すれば充分どころか大きい位だ。

(負けましたわ、今日の試合は)

とても卑怯な機体を使ってきた相手だった。

しかし彼は多分その、卑怯、が無くて、普通のISHでも多分自分に勝つてしまっているだろう・・・そう、分かつて、しまつ・・・

いつだつて勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとつて、この『分かつて、しまつた事が酷く落ち着かないものだつた。

(織斑、一夏)

あの男子の事を思いだす。あの、強い意志の宿つた瞳を。

他者に媚びることの無い眼差し。それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

(父は、母の顔色ばかりつかがう人だった・・・・・)

母は名家の令嬢だった。

そんな名家に婿入りした父は母には多くの引け目を感じていたのだろう。

小さい頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』と心に抱いていた。

そしてIISが発表されて女尊男卑の社会になつてから父の態度は益々弱いものになつた。母は、どこかそれが鬱陶しそうで、父との会話を拒んでいた。

それに比べて母は強い人だった。

女尊男卑社会以前から女というアドバンテージがありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた人だった。厳しい人だった。けれど、憧れの人だった。

そう、『だつた』。両親はもういない。三年前に事故で他界した。手元には莫大な遺産が残った。それを守るためにあらゆる勉強をした。

その一環で受けた I S 適性テストで A + が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。

両親の遺産を守るため、二つ返事でした。第三世代装備ブルー・ティニアーズの第一次運用試験者に選抜された。稼働データと戦闘経験値を得るために日本にやってきた。そして出会った・・・・織斑一夏・・・・自分の幼少期、自分の理想の強い瞳をした男と。

「織斑、一夏・・・・」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかつた。

「・・・・」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。

なんだか、この気持ちは。

知りたい。

知りたい。一夏の事を。

「・・・・・・・・」

浴室にはただただ水の流れる音だけが響いていた。

法律美容外科 オルコット、その鼻歌やめいー！（後書き）

ちなみに一夏のHISの必殺技は『シェルブリット』だけではありますせん。

他にもありますよ？

ネタは万全ですからね・・・

人間の限界越えてるんじゃなくて？ 大丈夫だ、格ゲーではテフオだしな

グーテンモルゲン（。・・。）

どうもマイペースです。

今回の話には格ゲー要素、ブンブン要素が含まれています。

好きな人は読んでください。嫌いな人は・・・読んでください。

感想やら意見、提案などがありましたら気軽に下さい。

では、MY PACE WORLD イツツ・ショータイム！――！

人間の限界越えてるんじゃなくて？ 大丈夫だ、格ゲーではテフオだしな

翌日、朝のS.H.R。

「では、一年一組代表は、織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりで良い感じですね！」

クラスの女子は大いに盛り上がっている。

山田先生、繫がりが良くて俺は嫌ですたい・・・

「ていうか、良くセシリ亞が代表譲ったよね？」

「そうよね？ あんなに、男が、とか言ってたのにね？」

数人の女子が疑問に思つてゐるのか、所々でつぶやいていた。

「それならこのわたくしが説明いたしますわ」がたんと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。様に為つてるのがうらやましい・・・。

「聞けば、一夏さんは専用機持ちにしても、まだ日が浅いにしてもこのわたくし、セシリ亞・オルコットを倒したのです。これで工Sの使い方が完璧になればクラス対抗戦では負けは無くなりりますわ」

おお～！！！と歓声を上げる女子達。

対抗戦に勝つと学食のデザートが半年無料券が貰えるらしい・・・
女子はデザートのために俺を生け贋に捧げるのかよ・・・

「やはりHS操縦には実戦が何よりの糧。 クラス代表ともなれば戦
いには事欠けませんもの」

いや、戦闘ならいつも喧嘩してるので事足りてるからなあ。

あ、でもHSを使った戦闘は・・・やつぱりソリューション役職にならな
いとできないよな。

流石に不良相手にHSつかつたら・・・無双だわな・・・

「そ、それでですわね」

咳払いをして、顎に手を添えているセシリ亞。

「私のように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間
がHS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長
を遂げ、わがクラスを勝利へ」

「バン！」

机を叩く音がクラスに響いた。

「そんな横暴が許せるかー貴様が教えるなら私が教えるわー！」

立ち上がったのは篠だった。

「あら、あなたはランクの篠ノ之間。Aの私のように何か
ご用かしり?」

「ら、ランクは関係ない!一夏は私のルームメートだ、ルームメー
トが教えるなら気軽に出来るから一夏も緊張せずに出来るからだ」
まあ、それなら理には叶っているが、オルコットからHISの運用云
々聞くのは良いなあ・・・

てか、

「篠つてランクなんだ・・・」

「だ、だからランクは関係ないと言つていいー。」

そんな大声で言わんでも・・・

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いていつてセシリアと篠の頭に出席簿を落とした千冬
姉の低い声が告げる。

「お前たちのランクなどアリだ。私からどれも平等にひよつとするな
まだ殻も破れていない段階で優劣を付けよつとするな」

流石のオルコットも千冬姉に言われては反論の余地が無いらしい。
「代表候補生でも一から勉強してもらつと前に言つただろう。くだ
らん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重
しろ」「

流石は大佐殿だぜえ！

俺たちには言えないような事を言つてのける、そこに痺れる憧れる
う――――

二十四年も生きてる人間はわけが違うぜ――

バシン！

「・・・・・お前、今何か無礼なことを考えてただろう

「そんなことないですよ大佐殿！ただ流石は俺たちよか年食つてる
な――――」

バシンバシンバシン！

「・・・・・さ、流石は千冬姉、まだまだお若いです・・・・

「ふん、わかればいい」

計四発のメテオは俺の脳細胞を死滅させていったのであった。

「クラス代表はこの馬鹿。異存はないな」

はーいと、クラス全員が一丸となつて返事をした。

「ではこれよりＥＳの基本的な飛行操縦を実践して貰う。織斑、オルコット。試しに飛んでみせろ」

あれから数日がゾンビクリムゾンし四月も下旬。

俺は今日もいついて大佐殿に教鞭をふるつてもうつてている。

「早くしろ。熟練したＥＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

(やばいな、そろそろ叩かれるな、来い)

左手で右手首のヒラを叩く。

この動作が一番しつくり來た。

他にも仮面ライダーのポーズを真似たりしたが・・・全部駄目だし時間がかかるからバスされた。

刹那、右手首から全身に薄い膜が広がっていくのがわかる。

約0・7秒の展開時間。

俺の身体にIIS本体が形成されていった。

(やつぱり軽いな)

ふわりと体が軽くなる。各種センサーが意識に接続され五感が変わつていく。

同じく、セシリアもIISを装備して浮かんでいる。

この数日間の交流で呼び方を変えたのだが初めて名前を呼んだ時セシリアは、顔を赤らめて伏せてたけど・・・

「よし、飛べ」

言われて、セシリアとほぼ同時に上昇した。

因みに普通は急上昇、急降下の時のイメージは『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』で『うらしいのだが俺のイメージは『銃から弾が出るイメージ』で行っている。

そのイメージのおかげなのかセシリアよか高い位置にいる。

「本当にエリックて凄いよな、飛行機よか速く高く行けるんだからよ、浮かんでいるのも不思議だしな」

まあそこいら辺は束さんに聞いたことあるからだいたい、理解してるとから良いんだけど・・・やっぱり現実味が無いんだよな・・・

「説明しても構いませんが、長いですわよ? 反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「セシ」は、理解してるから大丈夫だ。」

良くクラスの奴ら、たまに教師が引くくらいの頭を使う話をセシリアとするがその時のセシリ亞の顔は

「それもそうですね、一夏さんは、理解なさってるのですから」
楽しそうに微笑むセシリ亞。

その表情は嫌味でも皮肉でもなく、本当に単純に楽しこうという笑顔だった。

あの試合以降、何かと理由を付けて俺にエリックの運用法やらを教えてくれる。

そのおかげで前よかエリックを動かせるようになつた。

今だったらこの前の、ドイツ、代表生倒せるかな?

「一夏さん、今女性のこと考えてしまませんでしたか・・・」

「ふうっと頬を膨らませながらこひを睨むセシリアなのだが・・・なんだか、怒っているのが解るのに可愛こと思つてしまつ。」

「もう、いいですわ、後で聞きますから。そのときは一入きりで

」

「一夏っ！いつまでそんなことにいるー早く降りてこー。」

いきなり耳を襲撃した音声の出所は遠くの地上の山田先生のインカムを奪取した筈だった。

「織斑、オルゴット、急降下と完全停止わやつてみせひ。皿標は地表から十センチ、織斑は一ミリだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

いつて、すぐさまセシリアは地上に向かつ。

大佐殿の命令を了解出来ない俺はどうしたら良いのだらつか?

「//こひ・・・・・・」

「こつ見てもうまこもんだなあ。」

セシリアは難なくクリアしていく。

よし、やつてみるか。

俺は意識を背中の翼状のブースター・・・ではなく、足に意識を集中させ

「俺の妙技、PART1」

空気を蹴った。

つまり一段ジャンプの要領で空気を蹴り、ブースターを使わずに急降下したのだ。

(しつかし、試してみたかったとはいって一段ジャンプって結構速度出るんだな)

地上がもうそこまで来ているのでもう一回空気を、地上側を蹴り速度を殺しブースターを噴かして完全停止をやった。

「見事だ織斑、しかし普通には出来ないのか?」

「いやあ、やりたかったもので…」

多分今おれ滅茶苦茶きれいな笑顔だと思つ。

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「大丈夫だ。問題ない」

「そう。それは何よりですわ」

また楽しそうに微笑むセシリア。
なんだか可愛いなあ・・・

83

「・・・・・IHSを装備していくて怪我などするわけがないだりつ・・・

そこには篠が頬を膨らませながらセシリアを睨んでいる。

うーん、何だろ？、女の子が頬を膨らませたら可愛いと思つのは俺のフェチか？

「あら、篠ノえさん。他人を気遣うのは当然のこと。それがIHSを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前がいづか。この猫がぶりめ

「鬼の皮をかぶつてこらるよつマシですわ」

・・・・前言撤回、なにこの娘たち怖いんですけど。

人間の限界越えてるんじゃなくて？ 大丈夫だ、格ゲーではテフオだしな

きました。

格ゲーではよくあることだからやつてみたが大丈夫かなあ一一段ジャンプ。

実際ISなんつうトンデモスースが有るんだから良いかなあ～なんて氣で書いてしまった。

反省はしている、後悔もしている、だが直す気は無い！！！

武装がなければ必殺技をすれば良い。――ミスター・ド・コワーナウ（前編）

4日も過ぎてしまった1-6の春です。どうもマイペースです（。。）

最近一番ぐじを引いたらB賞を貰ってしまった。一年の運を使い果たしたと思つんだけど。。。。

感想やら意見等を貰えると実はマイペースはガツンポーズを取つていますので気軽に書いて書いて下さい。

では MY PACE WORLD 始まっています。

武装がなければ必殺技をすれば良い」――ミスター・ド・リラーなり

「おー、馬鹿ども。邪魔だ。端っこでやつてこい」

千冬は簞とセシリ亞の頭をアイアンクローラーしながら押しあつた。そして俺の前に立ち。

「織斑、武装を開けろ」

「そんなもの欠けらうござりません」

「やうか、そこには武装には武装が無かつたな」

千冬姉め、わかつてていいやがつたな！

そんなんだから一十四になつても貰い手がい「バシンバシン」・・・
・・・俺の心にはセーフティーガードやらプライバシーやファイ
アウォールは無いらしい。

「セシリア、武装を展開し！」

「はい」

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。普通は光の奔流を放出するのだが、セシリアのそれは一瞬光つただけだ。光が止んだ後その手には狙撃銃『スター・ライトマック』が握られていた。

しかもマガジンが接続されていて、セシリアが視線を送るだけでセーフティーが外れる。

一秒もかからずに狙撃可能まで完了していた。

良いんだが……そのポーズとドヤ顔、どうにかならんのか？

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめる。貴様は横に銃身を向けて誰に撃つ気だ。正面に展開できるように！」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な

」

「直せ。いいな」

般若降臨しましたあ！

言葉の暴力良くないぜ、千冬姉よ……

「…………はい」

あの顔は絶対文句言つてゐるぜ！

例えば年増と「バシンバシン！…………

「セシリ亞、近接用の武装を展開しろ」

「えつ。あ、はつ、はいつ」

ほらないきなり振られた会話にびづくつしてやがる。

絶対文句言つてたよ…………

銃機^{オーブン}を光の粒子に変換『^{クローズ}収納』をし、新たに近接用の武装を『展開』…………俺には一生縁の無い、セリフ、だわな…………

セシリ亞はどうしているのか、手の中の光はなかなか形をとらず、ぐるぐると空中をさまよつている。

「…………」

「まだか？」

「す、すぐです。　　ああ、もうハーメンターセプター』…」

これは武装を展開できないうときこの名前を叫んで頭の中のイメージを集中させ展開できるようになら。ところが所謂『初心者用』の手段である。

代表候補生とこうヒーローの肩書きを持ったセシリアにとっては屈辱的だらう…

「…………何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待つてもいいのか？」

「じ、実践では近接の間合いに入らせません…ですから、問題ありますわ…」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、一夏さんが専用機持ちだから、その……」

そこから先が、じょじょとまづいて、セシリアの言葉は聞こえなかつた。

とりあえず俺は個人間秘匿通信で、

『俺のせいにするのはやめてくれ、後で千冬が怖いから……』

『あ、あなたが、わたくしにとびこんでくるから……』

『仕方ないだろ？ 武装が無いんだから……』

本当に仕方ないだろ？

『とにかく責任はとつて頂きますわー。』

『逆ギレ良くはない』

「ん~、まだ時間はあるな、よし織斑、何かやれ。」

千冬姉、人はそれを無茶ぶりといつ。

まあ俺も実際飛んだだけだしな、仕方ない。

「はあ～、仕方ありませんね。セシリア、一発頼むわ」

そういうセシリアの方に向かつて右拳を突き出した。

「仕方ありませんね、では行きますわよ」

そういうセシリアはスタートライトマークを俺に向けて、引き金を引いた。

銃口からでたビームは俺の拳に被弾すると吸い込まれるように消えていき、俺の肩から一本の小さな羽が出てきた。

「おつむー、今日は何やるの?」

俺に聞いてくるのは通称・のほほんさん。

読んで字の如くのほほんとしている方だ。

なんだかマイナスイオン、否! プラスイオンを放出していくそつなそ
の雰囲気は心が和む。

「せうだな、のほほんさんはどんな技が見たい?」

「う～ん、そうだなあ～・・・かつこいい技ならなんでも良じよー」

満面の笑顔ありがとうのほほんさん。

さつて、どんな技やるかな・・・あつーそりだ、あれをやるか!

「じあ千冬姉、今からせりぬので皆を下がらせてください」

「だから織斑先生と「」の前のポートフォリオかたですか?」・・・皆下がれ

千冬姉は皆を後ろに下がらせた。だけど女性としてヨダレが垂れるのは感心しないな。

皆が俺から30メートル位離れてから俺は肩の羽を一枚昇華させて、右拳を地面にひとつとくつつけた。

「俺の必殺技PART・2、二重の極み」

その瞬間地面は爆発物で発破しかたの如く地面が抉れて、跡地には大きなクレーターが出来ていた。

説明しよう!

『二重の極み』とは、刹那の間に二発殴る。ただそれだけなのだが、威力は普通に二発殴るより数倍高く、修得するのに数年はかかる。

(いやあ、懐かしいなあ、千冬姉にいきなり川原に連れていかれ
て一重の極み修得するまで帰るな!とか言われたのを……小六の
良い思い出だよ……)

そう思ってふさつてると後ろから声をかかられた。

「よし、もうそろ時間だ。……織斑、それを出しておけよ

・・・・・ What?

片すつでこの穴をですか?

・・・・他にすれば良かった……

武装がなければ必殺技をすれば良い！ ミスター・ドリラーなう（後書き）

実は来週の水木金は学校の行事で長野に行くので投稿がストップしちまうのでそれまでに一巻を終わらせたいです。

二一ハオ！私は鈴アルヨ！

実際の中国人はアルとかは使わない（前書き）

言い訳をさせてくれ（ ）！！

実は今日から学校の郊外学習の一環で長野に行きます。その用意やら準備などでじかんが無かつたので投稿出来なかつたし、短いし・・・

それでも良かつたら見ていくください。。

「——ハオ！私は鈴アルヨ！」

実際の中国人はアルとかは使わない

「ふうん、ここのがそつなんだ……」

その夜。IS学園の正面ゲート前にボストンバッグを持った小柄な少女がいた。

外見、より制服が改造されているのだがこれは良いのだろうか？

肩口が「こいつ」無くなつており、色さえ変えれば某例大祭にでもでれるであろう。

「えーと、受け付けってどこにあるんだつけ……」

ポケットから出した紙切れを出したが、その紙はくしゃくしゃに為つていたのが彼女の性格を表していた。

「本校舎一階総合事務受け付け……だからそれがどこにあるのよ」

少女はわざと広げたばかりの紙切れをまたくしゃくしゃにしポケットにねじ込んだ。

「あ、セツコアコの学校にいるさじやん！ だつたら

女子はおもむろにケータイを取り出しうれた手つきで電話帳を開き電話をかけた。

久しづりに会うけど、元気かな……中学には、あんな、事が
あって荒れてたけど……

プチッ

『もしもし？』

「あー、夏ーわたし、鈴だけどー」

『あー、鈴かー懐かしいなあーどうしー』「夏あーーーまだ話が終わって
ないぞーーー』『げーーー篇、俺が何をしたんだよーーー』

『そりですわよー夏わんー今度は何組の女の子をたらしこんだん
すのーー』

『ああーセシリアもだから違うつて言つてるだらうがーーースマン
！ 鈴、また後でかけ直してくれー』『鈴つて誰だ（ですの）ーー』
・・・プチッ

電話が切れた・・・・・

誰？

私は今一夏に電話をしたはずなんだけどな・・・・・

なんで女の子の声がするのよ・・・しかも親しそうなの？

たつた一年合わないだけで、一夏は女つたらしに為つたらし！

電話をかけた時の胸の高鳴りは嘘のよつに消え、ひどく冷たい感情と苛立ちが雪崩れ込んで来た。

それからすぐに受け付けは見つかった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。HIS学園へよつ
ひや、凰鈴音さん」

事務員さんの言葉などわざのけで意識がどこかに行っていく。

見るからに不機嫌ですよ。と言わんばかりに唇を尖らせながら聞いた。

「織斑一夏つて、何組ですか？」

「ああ、噂の子？一組よ。凰さんは一組だから、お隣ね。そつそつ、あの子一組のクラス代表に為つたんですって。やつぱり織斑先生の親族なだけはあるわね」

事務員のお姉さんは知つてゐることを言つただけだった。

だが、その情報は断片的にしか本人にしか届いて居なかつた。

「・・・一組のクラス代表つて、もう決まつてますか？」

「決まつてゐるわよ」

「名前は？」

「え？ええと・・・・聞こいでどうするの？」

鈴音は満天の笑顔と血管マークの顔に・・・

「お願いをしようかと思つて。代表、あたしに譲つてつて

「

その手にはおもちゃと思われるナイフが握られていた。

再開とは時に悲しいものね 幼なじみにナイフ向けながらこうつなー。

「おつむー、おはよー。ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

昨日なんだか『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と言つパーティーに主席し、まだ疲れが残りつつ教室に着いてみるとのほほんさんに話しかけられた。

中学の時と比べると女子と話をしているのは一歩前進だね。

・・・・あの時女子として話した事があったのは・・・片手で事足りるからな。

「今の時期に転入生って、珍しいな？」

今はまだ四月だ。時期的にはもづれるとしか言い様が無い。

「そりなんだよー、なんでも中国の代表候補生なんだって～」

「・・・・・・・・・・・・えつ？」

中国・女の子・強い、これで連想されるものが俺の知り合いで居た

はずだ。

しかも昨日の夕方辺りに電話があつたのを覚えている。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

セシリアがどや顔と腰に手をあてポーズをしながら言つてゐるのだ
が・・・・

「・・・・あ、ああそつだな・・・・」

俺は内心びくつこっていた・・・

もしも予想通りに鈴が転入してきたのなら覚悟しなくては行けなくなつてくる。

「まあ一夏ならそんなに氣負いしなくても良いだろ? 代表候補生
だらうと来月のクラス対抗戦で一夏には勝つてもらわなくてわな」
筈が自分の事のように話している。

「まあ、やれるだけやつてみるが・・・・」

「やれるだけでは困りますわー! 一夏さんには勝つて頂きませるとー。」

「やつだぞ。一夏らしくなこぞ」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

みんなみんなが好きに言つてくれるぜ・・・

「織斑くん、頑張つてねー」

「フリー・バスのためにもねー!」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから、余裕だよ」

クラスの女子たちはみんなもう優勝商品のフリー・バスを貰つたかのようにテンションが高くなつていたのだが、

「 その情報、古いや」

教室の入り口から声が聞こえたから見てみるとそこには小型のラジカセがあった。

「一夏、平和ボケし過ぎじゃない?」

その声は次に後ろから聞こえてきた。

ひたつ

冷たい感触が首に当たつている。

「・・・再会だつてこゝのに言葉じやなくてバタフライナイフで挨拶つて、長らく故郷に帰つてて、日本の挨拶忘れたか？」

俺は平静を装い、後ろに立つてゐるであらう、幼なじみ、と言ひ放つた。

「何言つてゐるよー夏? 中学の頃なんかもつと酷かつたじゃない?」

・ やつぱりだ・・・俺の中学の頃を知つていて、この首に当たつているバタフライナイフの形状、こつはやつぱり・・・
「挨拶つてのはな、ただいま」と、おかえり、って言つただぜ・・・
・ 鈴

「やつね、じあせつけときつわ、ただいま、一夏

「やつだね、おかえり、鈴

鈴、凰鈴音、俺の幼なじみにして中学の頃の俺を知つていて

鈴は首に当たつているナイフを離すと・・・

「さひ、一夏、教えて貰つわよー昨日電話した時に一緒にいた女の子つてだれなわけ! ?」

「ちらりに指を差しながら問いかけてくる。トレーデマークのツインテールが軽く左右に揺れる。

「……ちなみに質問だか、教えたらいどある?」

「勿論、少しばかり、オハナシ、するだけだよ、大丈夫よ、一夏には迷惑なんてかけないから」

笑顔で答えた鈴だが、手元に持っていたナイフが煌めいていてそちらに目が行ってしまう。

「それは遠慮したいんだけど……」

「遠慮しなくても良いのよ!」

鈴はナイフを持って突進してくる。

「一夏あ!!--!」

「一夏さん!-?」

篝やセシリ亞が各々俺の名前を叫んでいる。

多分心配してるんだわつ・・・・・だけど!

鈴はナイフを斬るでは無く、刺すように俺に向け突進してくる。
パキンッ!

「鈴・・・そんな、オモチャ、で遊ぶなよ、鈴こそ平和ボケしてんじゃねえか？」

俺は刀身を真横から殴り、ナイフを折った。

「やつぱりナイフじゃ駄目か？だつたらこれでも大丈夫だよね！」

そういう鈴は両手を左右逆の袖に入れ何かを掴むと袖から手を抜いた。

その手に掴んでいたのは

「ベレッタ・M92とデザートイーグルの一丁拳銃・・・これならオモチャじゃ無いわよね？」

「・・・おいおい、あっちでも銃刀法くらいあつただろうが・・・」

鈴が出したのは一丁の拳銃だった。だが、女の子の制服、しかも袖口に入れるなんて無理にも程がある。だがしかし鈴は出来る
そう、『あの人』に教えてもらつたからだ。

「一夏は文句言えないでしょ？この、暗器方、教えてくれたの、千冬さんなんだから」

「ええーと、確かに中学の頃は彫刻刀やらコンパスだったような気がするんだが・・・いつの間にかそんな物騒なモンが入荷したんだよ・・・」

「べ、別に良いじゃないー！あー早く昨日一緒にいた女の子の名前を『そんなモノを振り回すな馬鹿弟子が』へブンー！」

俺に銃身を向けていた鈴だつたが、後ろからの奇襲に会い、気絶した。

やつぱつ顔はラーメンよねえ！ 開席ラーメン腐つてやがるー。

「貴様のせこだぞ……」

「あなたのせこですわよ……。」

昼休みになり、机の席にすかすかと早足できたと思つたら開口一番がいわれもない濡れ衣……てかなんで？

そりゃあ一人とも頭を押さえてる理由は授業中にぼーとしてたらただけだ俺は関係ないはずじゃ？

「自業自得だらうがよ、千冬姉の授業では一つとあることと血体が聞違いなんだよ……ひとつあえず腹へったから学食こへん」

「む・・・。ま、まあお前がそういうのならいいだらう

「や、やつですわね。行つて差し上げなこともなくつてよ」

はこはこあつがとつゝざれこます。

俺達三人、以外にも学食に行く奴らが学食に移動した。

俺は一応日替わづランチを買つた。

「待つてたわよ、一夏。」

わざと衝撃的な再開をした鈴が仁王立ちでセレニティだ。

「セレニティ、おまちやんに食券出せないし、みんなが通れないから

「う、いのちーわね。わかってるわよ」

ちなみに鈴のお盆にはフーメンとチャーハンが乗っていた。

男性なら食えない量では無いが、女子にはキツい量ではあるな。

「早く席に座つてろよ、のびるか？」

「わ、わかってるわよー大体、あんたを待つてたんでしょうがーなんで早く来ないのよー」

「知らねえよ

まあこいつが「ねむねこのまつも」といひだし、とつあえず俺は食券をおねちやんに出した。

「てか、どうしたんだよ。帰つてくるんだつたら連絡位くれたつてよかつたじやんか？」

「べ、別に良いじゃない！あんたを驚かせようとしてたんだから別に良いじゃない」

「そらそつだな。それより元気そうで良かったわ」

「う、あ、ありがと、・・・、夏の元気ないやない・・・」

再開の仕方はどうであれ、とにかくやつぱり、幼なじみ、が元気そうにしているのは良いな。

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンンッ！一夏わん？注文の品、出来てしましてよ？」

お~。今日の田舎わづランチは、ナシゴレン・・・・・・・学食で出

「どうあえずあっちのテーブル空いてるし行くか?」

鈴を含めた全員に促す。計十数人が動いてなお座れたのは奇跡だろ
う。

「鈴、お前いつの間にか、暗器方、の中にあんな物騒なもん仕込み
やがった? なんで、代表候補生、止まりなんだ?」

「質問ばつかしないでよ。アンタこそ、なに工事使つてるのよ。二
コースで見たとき、びっくりしたじゃない」

やつぱりこいつ、暗器方の中身教える気無いな。

中学の頃から中身教えてもらつたことなかつたからな。

「一夏、そろそろどうこう関係が説明してほしいのだが」

「やつですわ! 一夏さん、まさか『あらの方とつきあつてらつしや
るのー?』

・・・・・一人とも声が大きい・・・・・

それとそこいらのクラスメイト達よ、玩具を見つけた子供みたいな顔
をするな。

「べ、べべ、別に私は付き合つてゐる訳じや・・・・・・・・

「やうだぞ。鈴とはただの幼なじみであり、千冬姉の弟子仲間だよ」

「ただの…………」

「睨むな怖いんだよ…………早くそのベレッタを退けてくれ…………」

「

「ふん！…………」

「幼なじみ…………？」

鈴は頬膨らませてこっちにベレッタを突き付けていた。

「あー、篠が知らないのは無理ないな、篠が引っ越していくのが小四の終わりだつただろ？鈴が転校した来たのは小五の頭だよ。で、中一の終わりに国に帰つたから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

まあ、その間に、アレ、があつて鈴も千冬姉の弟子になつて、暗器方を教えて貰つて…………あれから鬼ごっこがリアル鬼ごっこに為つたんだよな…………

「で、こっちが篠。確か話した気がするが、小学校からの幼なじみで、俺の遊び場の剣術道場の娘」

本当は通いたかったのに、俺には如何せん、センス、が無かつたの

で通いはしなかった。

「ふうん、初めまして。これからもよろしくね

「ああ、」*ハハハハハ*

・・・・なんだろう、二人ともただ挨拶してるだけなのに触れては行けないものを感じるんだが・・・

「ンンンンッ！ わたくしの存在を忘れてもらつては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「・・・・・パスタ？」

鈴はセシリアの髪の毛を見て、パスタ、と言つた。

「なつ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？ まさか『存じないの？』

「うん。あたし他の国とか興味ないし

「な、な、なつ・・・・・・・・・！？」

セシリ亞の顔が白人の由もが無くなり、ゆでダコのよつて赤くなつていた。

「い、い、言ひておきまへけどわたくしあなたのよつな方には負けせんわ！」

「そ、でも戦つたらあんた、死ぬ、よ。悪いけどあたし、強い、もん」

そらそりだわな、こいつの強いところは、暗器方、の武器の豊富さでは無く、その豊富な武器を扱える、器用さ、にある。

「…………」

「い、言つてくれますわね…………」

篝は無言で箸を止める。セシリ亞はわなわなと震えながら拳を握り締めた。

「一夏、アンタ、クラス代表なんだつて？」

「ああ、中学時代の、アイシ、を反面教師にしてな……」

「…………やつ…………まあいいわ、」

『じくさん』と『ラーメン』のスープを飲み干していった。

「じゃあ、また放課後に会ってこくるからねー。」

鈴は自分の食器を片付けに行つてそのまま学食を出ていった。

風穴あいて一回死ねえ！ 声優が連づた十勝娘ー（前書き）

君死にたもうなかれと、ぢつもママペースです（。・。・。）

最近あるゲーセンでハマってるゲームがあります。

そのひとつには後書きにて書きます。

では MY P A C E W O R L D 始まればます。

風穴あいて一回死ねえ！ 声優が連づけ十勝娘！

バキュンバキュンバキュン！――

キンッキン――！

俺の部屋、筈の部屋でもあるこの部屋では、刀の音がするのはよくあることだ。

だがこんなに部屋が硝煙で曇つて、薬莢が転がるなんてことは無い。

しかも質が悪いことにその発生源は、刀まで持つてやガル。

「最つつづ低！女の子との約束をちやんと覚えてないなんて、男の風上にもおけない奴！風穴あいて一回死ねえ！」

この台風の田の鈴は暗器方でありとあらゆる武具を取り出して、部屋中に乱射、乱切りをかましていた。

「…………じつじつとなつた……」

それは今日のセシリア達とのHISを使った訓練を終わらした時だつた。

鈴は俺にタオルと飲み物を持っててくれたのだが、その時にうつかり、簞と同じ部屋だと云つてがばれてしまつて、その時に俺は、

「別に俺は良いと想つて、簞で助かってるよ。幼なじみだしな」

と言つたのが引き金だつたのだろう……

「……どうわけだから、部屋代わつて

「ふ、ふざけるなつーなぜわたしがそのようなことをしなくてはならぬーーー？」

時刻は八時すぎ。夕食も終わつておれがお茶をいれていると、いきなり部屋に鈴やつてきた。

・・・・・なんだかやな予感がするんですけど・・・・・

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょ？私は一夏だったら平氣だから代わってあげるよ。」

「べ、別に嫌とはいってないない・・・・・・。それにだーこれは私と一夏の問題だ。部外者に首を突っ込んで欲しくない！」

「大丈夫。あたしも幼なじみだし兄弟弟子だし。」

「だから、それが何の理由になるといつのだー。」

会話のキャッチボールが出来てない会話がここにある。ていうか、噛み合つてない。

といふか、目の錯覚だらつか。鈴は、荷物、を持つてない。

「こまで願に引っ越しに来ているのに荷物が見えないのは不自然だ。

・・・・・まさか・・・・・

「鈴・・・・」

「何?」

「荷物とかは、服の中か?」

「そうだよ? あたしは50キロを越えなきゃなんだって。『服』に入れられるもん!」

・・・・中学の頃は50キロで止まつたのにここまで増えたと某英雄王の、四次元ポケット、並みだよ・・・・

「とにかく、今日から一夏と同棲するのは私だから」

「ふ、ふざけるなっ! 出でていけ! これは私の部屋だ!」

「『一夏の部屋』でもあるでしょ? じゃあ問題ないじゃない、下手すれば一夏と寝るし」

「勘弁してくれ、俺たちはもうガキじやねえんだし。」

女の喧嘩は何かが食べないと呟つが、『もつともだ。頭が痛い。

「／＼＼＼＼そ、そんなことさせんーとこかく出でいけー」

「ところどさ、一夏。約束覚えてる?」

「早くでていけえ！――！」

激昂した籌はいつでもそれるようにベッドの横に立て掛けであった竹刀・・・・の隣にある木刀を握る。

「ちよー・やめ　」

止める隙はあつたが、それが普通の人なら止めていたが、木刀がむかつていつたのは、暗器方の鈴である。

スカツ・・・・・

「――――」

籌が驚愕している。何でかといふと、さつき待て一メートル位あつた木刀が今は柄しか無くなっている。

それはとこうと

「今の一撃、切つ先のスピード、200キロ位行つてたけど、私に

は止まつて見えるんだよね～

鈴の服の袖から顔を出す十数本の日本刀、サーベル、太刀等が木刀を細切れにしたからだ。

「・・・・・・・・・・・・

多分驚いていたのは多分筈だけだった。

まあ、中一の夏休みの修行期間中なんかは千冬姉・・・寝てる最中に木刀を大きく振りかぶつてたからなあ～・・・・

それに比べれば筈の剣速なんかは遅く見えるだらうよ。

「ま、良いけどね」

「・・・・・・・・・・

「氣まづい。この空氣に耐えるなんてことは俺には出せん。

「せつにえば鈴、約束の事だけど・・・

「うふ。覚えてる・・・・よね？」

うへん、確か約束したのは小学校の頃だからあんまり自信無いし、中学の頃の方が、衝撃てきだつたしな。

・・・・・あつ！？あのことか！

「鈴、覚えてるがー！」

「そ、そうよね！当然の事よね！」

「ああ、確か鈴の料理の腕が上がつたら毎日酢豚を――――

「うそうそー！」

鈴は擬音で、パツ、と出でさせつた笑顔を見せた。

ふふつ、やつぱり合つていたか。小学校の頃の約束を覚えてこると
は俺の頭も捨てたもんじゃないな。

「奢ってくれるんだろ？」

・・・・・・・・・・・・力チンッ！

その瞬間鈴から沢山の弾丸が飛んできた。

そして冒頭に戻るわけだが

「最低つー最低つー最低ええー！女の子の約束忘れるなんて本当に最低ええー！」

「ちょー！お前！いい加減にしろつー…そもそも疲れてきたんだよー！」

あれから五分くらいだらうか？

そろそろ弾丸を避けるのが疲れてきた。

「もう知らないからねー！」

バタンツー！

鈴は額に十字を浮かべながら血室に戻つていった。

「・・・・・・・・」

わざわざまで傍観していた筆がこちりを見ている。

しかもその皿は、まるで残念な皿であった。

「あ、あのぉー、なんで箸さんば、そんな怖い皿をしておられたの

ですか？」

「一夏。人間と言つのは物事を忘れるものだ。だがな、女の子との約束を忘れるとは・・・・覚悟は出来てるな？」

「えつ？」

「籌の手を見てみれば、いつの間に出したのかわからないが、木刀が一振り握られていた。

「おま！木刀は不味いし、ビロから出しやがった！」

筹は歩み寄りながらこう言った。

「そんなもの・・・・『都合主義』だあ！」

「そりゃ最強だわ・・・・

パシンッ！

風穴あいて一回死ねえ！ 声優が連づた十勝娘！（後書き）

スサノオツヒー（ ； ） ！

最近、自分はゲーセンにある『ガンダムエクストリームバーサス』にハマつており。

使用機体がスサノオなんですけど、まじでスサノオは強いですよ！
まだ、2000円位しかやってないんですが、自分はスサノオだけ
を極めようと思こます（ ； ； ）

まあ、最近投稿が滞つてるのはゲーセンに入りびたつてるからなん
ですけどね・・・

まあ、こんな作者が書く作品ですが、感想や意見等はいつでも待つ
てますのでよろしくお願ひします（ = ； ； ）

アンリバトラツトつかつこいいわよね 鈴よ、着いてこねるか？

試合当日、第一アリーナ第一試合。組み合わせは俺と鈴。

絶対に千冬姉が仕組みやがったな・・・

代表候補生と暫定代表の噂の新入生同士の試合とあって観客席は満席であり、VIP席の要人どもは血走った目で注目していた。

ちなみに会場に入れなかつた生徒達は外のリアルタイムモニターがあるらしくそれで鑑賞している。

しかも、この試合は後々DVDに焼かれて全生徒に配られるらしい。

つまり、俺と鈴は詰まらない試合をしようものなら後々で、千冬姉に真剣でリアル鬼ごっこを仕掛けられるのである。

（まあ、鈴と試合をしたら詰まらない事にはならないだろつけどな・・・）

俺の視線の先では、鈴とそのヒス『甲龍』が試合開始のときを静かに待っている。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください。』

アナウンスに促されて、俺と鈴は空中に向かい合つ。

「一夏、今回の試合は私達にとって良い試合にしましょう。」

規定の位置から移動してきて握手を求める鈴だが・・・。

「握手したらブスリだろ? もうその手のネタは飽きたよ・・・。」

「あれ? ばれてた?」

鈴は手の平を文字どおり返すと手の平から日本刀が生えてきた。

しぶしぶ規定の位置に戻る鈴。

「やつやつ、一夏。一夏のヒスの特殊能力だけど、あれってビームしか意味ないんでしょ?」

そう、それに關してはセシリ亞の裝備は出来レース並に有利だった。

だが、IISの中にだつて実弾や質量刀を使うところだつてある。

「つまりはさ

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響くブザー、それが切れる前に俺たちは動いていた。

「日本刀は吸収出来ないでしょ？」

鈴は先程手の平からだした日本刀を俺の方に投げてきた。

バキッ！

向かつてきた日本刀の腹を横から殴り付けて叩き落とした。

日本刀は地面に刺さつた。

「やっぱり駄目だよね、だったら一本じゃなくつて数十本だったら大丈夫かな？」

鈴はさつきの日本刀同様、手の平から刀という刀を出しまくり、しかも鈴の後ろの方にも曼陀羅のように刀が出てきてる。

「一夏、この程度捌ききつてよね?」

「鈴さんや、それは無理な相談だよな・・・」

ヒュンヒュンと、数十本の刀達が風を切りながらこちらに向かって
来た。

それを俺は捌くために。

「108マシンガン! ! ! !

昔懐かしの108発の蹴りで対応する。

だが、蹴りだけでは捌ききれない刀は手でとつたり殴つて折つたり
等をして刀を落としていった。

「あああ、やっぱり捌ききつちやうよね・・・けどね私のHSに
はまだ、カードがあるんだよ!」

「おう、来いよ。例えどんなジョーカーをきりつといひの戦いは負け
られないんだよ」

「当たり前じゃない、私だつて負けたくないんだから。」

鈴は今度は両手にサブマシンガンが出てきてる。

「どうやら鈴のIISの能力は解らないけど、あれも、暗器方を使えるらしい。」

「ズドオオオオオンッ！！！」

「！？」

鈴がトリガーを引こうとした瞬間、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

「…………は、不幸だ……」

アリーナには遮断シールドがアルのだが、それを貫通して入ってきた衝撃波らしい。

「どうもこちにちは……名前やら所属やらは言いません……」

アリーナの中央からあがる煙には、三機、程、機影が見える。

声はスピーカー独特のHローがかかっている声であるが声質から女だと言つことが解る。

「いやいや、こんなにアイキャンフライしながらの登場とか、人間として燃えるでしょ？」

声質からさつきと喋つてゐる奴は同じだ。やつすると、多分だが、相手の三機の内、一機は無人機だろう。

「あ、目的言つてなかつたですねえ！」

煙が晴れるところには、黒い鎧をイメージさせるH/Sが一機と、白を基調とし、白い、純白の槍を持つたH/S、多分こいつが声の主だわ。

「一夏さん、お上からの命令です。」「」

その女性は槍をじりじりに向けると、じりじった。

「拉致去れやがつてください」

その時に女性のH/Sは瞬間的なブーストをつかつて俺と肉薄な所に

槍を突いた。

「あ。本気で抵抗して下さいよ?じゃないと生け捕りの筈が殺しちゃいますから。」

「女性があんまり殺す殺す言つちや黙だめだせ・・・・・

俺は笑いながら田の前二メートルの女性に言った。

「鈴、お前はあの無人機の相手でもしてやれ。」

「うん。・・・・氣を付けて・・・・」

回線で聞こえる鈴の声が震えている。

「鈴、心配するな、今までの、そして今の俺を信じろ。」

「・・・・うん。負けんじやないわよー。」

そういう鈴は、残りの無人機の方に向かっていった。

「へえ、よくあの人形が無人機だつてわかったね?」

「まあ、乱入してから一言も喋つて無かつたから自信無かつたけど、今のお前の言葉でわかった。それにお前も無人機だろ?」

「あ、あれ? な、なんの事かなあ?」

「とほけるな、俺から見えるその身体だつてよくできた人形だろ?、多分拘束された時のデメリットを考えてだらうけどな・・・」

それにさつきから奴さんの身体の、細かく言えば筋肉の動きが全くと言つて良い程動かなかつた。

ただそこに置かれた人形に見えたから俺はそう仮定を立てた。

「・・・・へえ、ただのE-Sを使える男だと思つてたけどそこまで思考出来るとは思いませんでした」

女性は俺に向けていた槍をどかして後ろに飛び、距離を測つている。

「まあ、さう焦るなつて。買つてやるよ、この喧嘩」

俺もファイティングポーズをして臨戦体制に入った。

「そうだなあ、私、てかこの人形に勝つたら私がそっちにいってキスしてあげるよ！」

スピーカー独特のエコーがかかった声が聞こえる。

アンリ//トシトヒカツヒイイわよね
齡よ、着いてこれるか？（後書き）

ちなみにオリジナルISのデザインは『ガンダムテスティー』のアビスガンダムです。

雑種よ、私の財産を見せてやるー 鈴さん? キヤウ連つかりわ?

(前編)

最初に言つておぐ。後悔はしてない反面もしない。

この話には鈴トロロロロロ成分が入つてます。

それでも良いところの方は読んで読んでください。

感想やら意見、待つてます。今回の鈴についての・・・『おーー・
ーーー』なセリフもどどどん下せー!

では、MY PLACE WORLD 開幕です。

雑種よ、私の財宝を見せてやるー 鈴さん? キヤウ連つかりわ?

鈴 S I D E

わ、一夏にも頼まれちゃったし、そろそろ始めるかな・・・

相手が地上から動かない所を見ると相手は飛べないのか?

とつあえず同じ土俵に行くとしますか。

ヒュウン。

私が地上に着地した瞬間だつた。

二機の内、一機が手の平をこちらに向けてきた。

その手の平からだんだんと粒子が野まつていき、そして

射出された。

「よつと。」

ピュウン!

射出されたビームは一直線に飛んできたので避けるのは容易にでき
た。

「じゃあ、お返しにこれでもあげるかな?」

私はさつきみたいに手の平から刀を出し投げました。

一夏のよつて防ぐのはまず無理だろ?。

一般的にあの捌き方はあり得ないから。

刀を投げた瞬間、さつきビームを出したIISは後ろに引き、もう一個のIISが背中から球体みたいな物を出し、その球体がIISの目の前で円形を描き、シールドのようなモノを形成し、飛んできた刀を消滅させた。

「・・・・全く、そんなに簡単に消されると自信なくなるんだ
けどなあ・・・聞こえてるんでしょ・・・バイロットさん」

「・・・ふつ、やはり分かりましたか、中国代表候補生さん」

やつぱりあの連携のされたかたは無人機じやなかつたか・・・

「けど、残念ながらそこにはいるのはただの人形でしかありませんが
ね・・・」

「姉貴ー！」なのに本当の事話もなくたつて戻いじゃねえかよー。どうせ死んだからよー。」

ビームを出す方のエリからもスピーカー音が聞こえたと思つたら、手の平をこすりに向けるとビームをまた出してきた。

「よつと。」

チコドンー！

避けたビームが着弾した所の地面は捲れている。

威力は中々のようだ。

「・・・まったく、姉の方はちゃんとしてゐるのに妹の方はとんだ猪、ある意味バランスがとれてる姉妹だ事で・・・」

「ふん、身内以外から言わると心に来るものがあるわね・・・」

「姉貴！俺たち馬鹿にされてるんだぜーなんで冷静で居られるんだよー。」

そう、本当にバランスがとれてる姉妹だ。

攻撃的な妹が火力高めのISを、クールな姉が防御に特化したISを。

一機だけなら落としよつは沢山あるんだが、一機が重なると1+1
"1ではなく、2や10にでもなる。

本当に仲が良い。

しかも姉の方は防御だけで攻撃はしないところを見ると、容量全部
をあの円形の防御に回してると思つ。

「（はあ）、一夏の右手だつたら一発で粉碎出来るんだけど私じゃ
火力不足かな？」

そう思いながらも私は刀を投てきを繰り返してはいるのだが、やは
りあの円形の防御に蒸発させられる。

「・・・姉貴、こいつ詰まんないよ・・・だつて弱いよ・・・」

「・・・やはり、事前にデータを貰つた甲斐が有りましたね、この
『ベルフュゴール』の、シールド、を突破する火力は持つてないよ
うですね」

「もう決めちまおうぜ！」の、メリクリウス、の、粒子波動、で粒

子すら残さねえよ……」

「やつぱり情報を持つてたのね……アンタたちひどいの差し金よ・・・」

彼方もビームを放つ用意をしてるので一応今度はマシンガンを出しておく。

「……誰かは言えませんが、そうですね、あなた方、鳳鈴音、と、織斑一夏、の中學時代の同級生ただけ言つておきましょ。」

「…………まあ…………まだ、『アイツ』は邪魔するんだ……」

「、『アイツ』はスゲーゼ？あんたらの情報を余すとこ無く教えてくれてしかもこのエラまでくれたんだぜ！」「

「…………解放、展開・・・・・・」

「ああ？テメ何言つてるんだ？まあ良いや。いい凹・・・くたばれよ！……！」

妹の方が手に粒子を集めながら「ちりこ」突っ込んだ。

「ぢゅやー、ゼロ距離から放射するらしい、だけど関係ないよ・・・

『 アイツ、が闇わってるんだつたら手加減はしなくていいよね？

ザシュ・・・ジャキンジャキンジャキン

「な、なんなんだよ！？！」

金属が切り刻まれる音がアリーナに響き渡る。

切り刻まれるのは妹の方のHS、ぢゅやってかといつと・・・

天空に余すことなく展開されている刀剣の数々。

それの極一部が敵に降り注いだだけである。

そして降り注いだ刀剣はHSを磔にした。

「貴様なにをした！」

姉の方が私に問い合わせてきた。

何で聞くんだろう？私はただ・・・・・

「私はただ、『武器』を『展開』しただけだよ・・・・・」

「なつ！貴様の武器はただの刀剣と銃機を出すだけでは無かつたのか！」

「それは手の平から出した方が、様になるだけだからだよ、少し容量は食うけど少し離れた所にだつて出したりそれを射出出来たり出来るんだよ。」

「そ、そんな情報はデータには無かつた筈だぞ！」

「それはそうだよ、『アイツ』が素直に情報を教えるわけないでしょ？」

「そういいうながら私は空に浮かぶ無数の刀剣を敵のIISに切つ先を全部向けた。

「まあ、良いわ、この刀剣の数々、これが私が今出せる全ての刀剣よ。」これさえ防げば貴方の勝ち、防げなかつたら私の勝ちよ・・・・・

「……ふん、私のベルフュゴールがそのような攻撃に食らはづ
が無い、否！食らつてわいけない！」

そういう、ベルフエゴールは背中から球体を出し巨大な円形のシールドを開いた。

「行くわよ！」 刀剣舞踏会

「アホなやつらが…！…！」

いく。

次々と射出した刀剣はシールドに接触するとやはり、蒸発していく。

だが、接触のさいに段々とシールドが小さくなつていいく。

百、二百、三百と刀剣はベルフェゴールに向かっていく。

だがそれは蒸発していく。シールドを縮小していくのを代償に・・・

ザザザザツツツツ！

刀剣が外れ砂煙が上がる。

そして全ての刀剣の射出が終了した。

砂煙が段々と晴れていく。

そこにはシールドはもう消滅し装甲が所々削れては居るがベルフェ
ゴールは立っていた。

「・・・・ふつ、ふふつ、ハツハツハ！どうだ！耐え切ったぞ鳳鈴
音ー」これで貴様は何もできな「ザシュー！」なつ！？」

全ての刀剣を耐え切った慢心からだらうかベルフェゴールは油断して
いた。

そこを私が一本の刀で切り捨てた。

「なつ！？貴様、もう刀剣は出せないんじゃー。」

「あら、敵の言葉を鵜呑みにしてくれたの？ありがとうね、騙しやすかつたわよ。」

実は一本だけ残しておいたのだ。

これは千冬さんに教えて貰った、暗器方、の基本『暗器の数を悟られるな』。だから私は嘘の数を教えた。

「・・・ふん、そうかこの場面は私の慢心から生んだ姿か・・・最後に教えてくれないか？」

胴体を横屈ぎに切り裂いた為上半身と下半身が分かれ、地に伏せているベルフュゴールから、砂嵐混じりのスピーカー音から響いた。

「何よ。」

私はベルフュゴールの上半身に近づき声を聞いた。

「貴様と私は50メートル程離れていた筈だぞ、一瞬でどうやってこれた。」

「ああ？ その事？ それはね、刀剣解放で展開した刀剣に全部容量をはたいて、『軽くなつたのよ』」

つまり、刀剣を射出する事で、データ、を、捨てていい、事と同じ事であるため、刀剣を射出すればする程この機体は、軽く、なつていき、あの卑さが生まれる。

「なるほど、勉強になつたよ」

「それせどりいたしまして・・・じゃね。」

刀でベルフェゴールの上半身の頭を貫いた。

「さて、ijhちは終わつたし、一夏の方は「ドオオオン」ー?何よ?」

音の発生源を振り向くとijhは、それまでの由い槍を持った工Sが半壊している。

しかも首根っこを捕まれて吊り上げられている。
その首を掴んでいる、一夏だった。

パイロットは一夏だったのだが、ISが違かった。

一夏の白ボスの白さは無くなり、今は溶岩のように赤く、血のような
紅さを持つ『赤』だった。

雑種よ、私の財宝を見せてやるー。餘れん? キヤウ違つからね? (後書き)

ベルフューポールとメリクリウスはトラン开出でべるフルスキンのポーレムと同じグラです。

これが俺の風林火山だあああ！…………本当に暑苦しいわね…………（善）

ブラックオンスロート…………ブレイブルー発動！！！

どうも。・。・。）最近ブレイブルーのタオカ力にハマっている
マイペースです。

いやあ、行きつけのゲーセンからブレイブルーが消えてアクアプラス
の格ゲーが入るなんて聞いてないよ…………

感想や意見、一夏君のレベルアップなどどんどん書いていて下さ
い！！

では、MY PACE WORLD 開幕します。

これが俺の風林火山だあああ···本当に暑苦しいわね···

「（身体が熱い）···（

俺は身体から嫌な位な汗をかいていた。

それは暑さによるものだ。だが今は夏では無い。

何故かと言つと

『紅』だからだ。

俺の機体がいつも『白』ではなく、『紅』であるからだ。

そして俺はさつきまで戦っていたHSの首根っこを掴んでいた。

その首の所も段々と溶け始めてきている。

なぜこのような状態になつたかと言つと

かでどうじよひ？

あのフルスキンの一體も遠隔操作だらうけで、相手が、鈴、じゃ勝てないだらうから心配要らないだらう。

問題は

「で、私達も始めちやうへカウントするよ？一〇・・・九・・・

槍をクルクル回しながらカウントし始めたこいつであらう。

彼女だけ機体が違うとすると多分フルスキンの一機より、権力が上か、実力が上なんだらう。

「・・・・・八・・・・七・・・・ヒヤア 我慢できない、〇

「てえ、ちよおまー！」

カウントを中断してエリが突っ込んできた。

「ハイハイハイ！」

相手は自分のリーチに入ると頭、右腕、左腕、右足、左腕、胴体と各箇所に突きを連発してきた。

しかもあまりタイムラグが存在しなかった。

「……ホツ、ハツ、とりあ！ めえ！ 九頭龍閃じあねえんだから
！」

取り敢えず捌きはしたが四肢のほうにかすり傷が少し出来た。

「ヒヤア やつぱり良いね 一夏さん、あの織斑千冬の弟なだけある
ね」

「そりやどつも……てかお前も十分強いだろ？」

「……駄目なんだよ……こんな強さじゃ駄目なんだよ……」

教えてあげるよ、と槍を降ろして話し始めた。

「私はね、いや、私達はね孤児なんだよ……けどね産みの親は居
ないんだよ……」

・・・・またか話には聞いていたが・・・

「HISを操縦するために産み出された命なんだよ。」

「……やつぱりか……」

「けどね、そこの企業じゃ適性が高くないと使ってくれないんだよ。
・・生憎私達の適性はござりまつ・・・」

「……それで捨てられたと……」

「さうだよ、しかも私たちは造られた生命だから寿命も短いんだよ。
・・私達幾つに見える？生まれてまだ5年しか経っていないんだよ・・・」

「……」

「寿命も短くて、存在価値まで否定されて捨てられた時に、彼女
は私達の前に表れた。」

・・彼女？

「これらのコーダーの事か？」

「、彼女、は私達に存在価値を『教えてくれた。そしてIISを、それを使うための力と知識をくれた。」

「・・・出来ればその、彼女、つうのが誰なのか教えてくれないか?そろそろ夏休みだろ。お中元でも贈つてやるよ・・・」

「大丈夫よ。一夏さん、貴方は、彼女、の事を多分、ここにいる誰よりも知っているよ・・・だってあなた方は中学校の同級生なんだもん。」

・・・・・・・・はあ〜、またかよ・・・

「わかつた、誰だか解つたよ。成る程、、アイツ、ならお前達みたいな奴等を助けるよ・・・だけどよ!・・・」

俺は瞬間的な移動をし、一気に自分の拳の範囲に飛び込み。

殴り飛ばした。

「クッ!」

相手はなんとか槍で防いだのでダメージは無いようだ。

「アイツが関わってるんだつたら容赦はしない。俺はテメエを助けるために、『アイツ』の犠牲者をもつ出さない為にテメエを殴り飛ばす。」

さつき殴った時に槍がへこんだのか彼女は槍を粒子に変換して、新しい槍を一本新しく出してきた。

「・・・やっぱり一夏さんは少し変だよ・・・みんな、孤児院の皆だつて私達が造られた生命だつて知つたら気味悪がつてたのに、一夏さんは助けてくれるんだね・・・」

「当たり前だ。困つてる奴がそこに居るんだ。助けない道理が無いだろ?」

「ありがとう・・・だけど、私にも居場所を、価値をくれた人の為に戦わないといけない理由があるからね・・・行くよ!」

一本槍を両手で持ち、こちらに突進してくる。

「お前のその意氣、かわせて貰おう!」

俺も右手を引きながらブーストを吹かし、迎撃をしようとしていた。のだが

ピリツ、パリパリツ。

「え？」

いきなり相手さんのHSの頭部から放電し始めた。

「どうした！？大丈夫か！」

「う、うわあああ！」

敵は頭を押さえていて、聞こえる声はスピーカーのHSに砂嵐混じりの叫び声しか聞こえない。

カラソフ

両手に持っていた槍を手放し手をだらんと垂らして立っている。

ウイイン

いきなり敵のHSの隣に四角いウインドウが出てきた。

そのウインドウには『SOUND ONLY』と書かれていた。

『 まつたく、あんなに情に流されちゃいけないって言ったのに流れちゃってさ、『兵士』が情を持ったらただの『人間』になっちゃうじゃないか・・・』

この声、人の事をわかっている口調、この人を人と見ない口調・・・

『 そういえば、久しぶりだねー君、リンリンもいると思つけど、懐かしいねえ・・・』

「・・・テメエ・・・中学の頃に潰したのにまだこんな事してたのか・・・」

『 何言つてるんだいいー君！そこに困つてる人が居るんだ！助けない道理が無いじゃないか？僕は人を助けるのを生き甲斐にしてるからね・・・』

「それで恩を売るだけ売つて利用する。中学のこれから変わりねえな。」

『 まあね・・・』

「それでそのIISの操縦者はどうしたんだよ・・・」

『ああ、シオンちゃんの事？いやあ最初はーー君とリンリンの詳細データを探りせよつとそつちに送ったのに、シオンちゃんに情が生まれちゃつてさ、だから電気ショックで氣絶させてオートバイロットに切り替えたんだよ・・・』

「やうか・・・氣絶か・・・なら良かつた・・・」

『何？僕がシオンちゃんを殺したのかと思つた？そんな事をしないのは分かつてゐるでしょ。けど、シオンちゃんの事を気に掛ける暇があるんだね』

そう言つとヒロは一本の槍を拾い、机に向かってき、槍を突きを連発してきた。

のだが

『あちやあ、やっぱり駄目か。』

ヒロは俺が居る場所より10メートル前で突きを連発していた。

『こやあ、実はこのヒロはシオンちゃんが使ってこそのヒロでね。オートバイロットにするとバクが発生するんだよ。だけどね一つだけオートバイロットにすると向上するスキルがあるんだよ。』

それはね、といった時にアリーナの席では無い、俺達ISが出撃するところ、つまつペットの所から

「い、一夏あああああ…！」

ポーテールが揺れていて、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「男が、そのよつな奴に勝てなくてどうする…！」

「びつせり、篝は激昂を飛ばしに来たのだらつ。だけどマズイ…！」

今日の前に居る敵は

『・・・話が途切れたね、このHSが唯一向上するスキル、それは
ね』

そういうと、HSはいきなり一本のうちの一本を捨てもつ一本を投げきをする体制に入った。

『投げきなんだよ。』

HSから放たれた槍は一直線にこちかに・・・否、篝の方に飛んでいった。

「マズイ…！」

俺は全エネルギーをブーストに回し、篝の方に向かっていった。

「ぐつー間に合ええ！……！」

俺は右手を伸ばして簞に向かっていった槍をつかんだ。

「…………一夏…………」

田の前には簞が居た。どうやら、槍が飛んできて腰が抜けたのだろう、地べたに座っている。

「簞、後で説教と拳骨食らわしてやるからな、そこで大人しくしてろ。」

『ああ、残念。けどもう一本の方で再チャレンジも有りだよね。』

そういう、ISは落とした槍を拾い直したのだが。

「……テメエに再チャレンジはねえよ……有るのは無だけだ……」

手を抜く筋合いはねえ、本氣で行かせて貰うー。

「俺の情報が欲しかったんだろ？だったら見せてやるよ……絶対の恐怖をよ……」

俺は右手を前に掲げて左手で右手首を掴む。

「第666拘束機関解放！－－－風林火山発動！」

『行くよ？ガイ　ボルグ！－－』

敵機が投てきした槍には今度は蒼いオーラが纏つていた。

多分今度は本気なんだろう。

だけど、もうお終いだ。

俺には紅いオーラが纏い始め、白式が白いボディが徐々に紅くなつ
ていく。

俺は手を前に出した。

ジユウウ

飛んできた槍が前に出した右手に接触しただけで槍が溶けていった。

『凄いね－白式の色まで変わってるね－』

「そう、これが、風林火山、の、火、、紅赤朱。簡単に言うと火を使う事が出来るだけだ。」

そういう、俺は後ろに炎を出し、瞬間的に敵機の目の前に行き、首を掴み吊し上げる。

『・・・激しいね？女の子に嫌われるよ？』

「良いんだよ、夜は優しくしてやるよ。」

そして最初の方に戻るのだが。

『ふーん、僕の手作りのEIS、キツツキ、の装甲を溶かしちゃうなんて凄い炎圧だね。』

SOUND ON/OFFのビジュンから飄々（ひょうひょう）とした声が聞こえる。

「ああ、こんなガラクタ直ぐに溶かしてやるよ。フンッ！」

俺が力を入れるとキツツキを掴んでいる右手の炎圧が上がり、一瞬で溶かした。

『・・・・予想外だつたけどありがとうねー君。いー君とリンリンの良いデータ取れたよ。それじゃあまたね?』

「俺はもう会いたくねえよ、『雀』

『』

SOUND ONLYは消えた。

その声の主、世界最大の偽善者にして最大の悪、羽富雀、はまた俺の前に表れたのだろう。

後日談つて重要なだよな・・・」今まで大変だつたよね

(前書き)

私には更新を遅らせる免許が有ると言つた!!

どうもMr・マイペースでござる(。・・。)

いやはや、遅れてしまつて申し訳ないではい。なんだかこの話
は個人的には面白くなく。書くのに時間がかかりました。

感想や意見、はたまたネタ技の募集中でござれる。

では、MY PACE WORLD キックオフです。

後日談つて重要なだよな・・・」今まで大変だったよね

一夏SIDE

「う・・・・・・・・・？」

右手の痛みに呼び起され、目を覚ました。

取り敢えず言わせてくれ

「知らない天井だ。」

（確かに、風林火山を発動させてよりもよって紅赤朱なんか発動させたから反動があったのか？）

「ひや、ここがわ解らないが、自分はベットの上に寝ている。

「気がついたか」

シャツとカーテンがひかれる。確認する前に行動。・・・変わらないな、千冬姉わ・・・

「身体には致命的な損傷は無いが、炎圧、が高かつた右手だけ少しばかり火傷している。まあ利き手が火傷は地獄だろ？が、まあ慣れろ。」

「・・・だからって右手が包帯グルングルンって・・・」

千冬姉に言われて右手を見てみると包帯がアメリカンドックのよう

に膨れていた。

「・・・で、一夏。今回の襲撃の首謀者、羽宮雀、について
なのだが・・・聞いても良いか。」

「千冬姉。それだけは許さないよ。アイツとの決着は俺が鈴で決めるって決めてるんだ。もしも千冬姉が決着を付けたら俺は千冬姉・・・
・・殺すよ。」

「ふん、冗談だ。さつき馬鹿弟子にも同じ事を聞いたり同じ解答が帰ってきたよ。」

鈴もやつぱり思つてることとは同じか。

『誰にもアーツとの決着を譲りたくない』んだよな。

「千冬姉……」めん。」

俺の呟きを聞き、千冬姉は満面……とは言えないものの、笑った。

「大丈夫だ。おまえはもう一人で物事を片付けられる位に成長しちゃうが、困つたら私に言え。なにせ、私の弟だからな」

「そうだね、俺は千冬姉の弟だもんな。」

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻つていいぞ」

それだけ言い残すと、千冬姉はすたすたと保健室から出ていった。

「…………そお…………」

千冬姉との入れ違いに誰か入ってきたようだ。……なんだ? カーテンに隠れては居るんだが頭の尻尾が見えてるぞ?

「……はあ。入つてこいや雛。拳骨は勘弁してやるからよ

「……ほ、本当か。」

わざわざまでは尻尾しか見えなかつたカーテンから、そりあ、と压しかけたのはやつぱり簾だった。

「あ、あのだなつ。今日のことだけだな・・・」

「一いつじごでやわらか、エヒを展開せずに戦場に来たら、上手くて五体不満足。下手したら土と見分けがつかなくなるぞ?」

「うー? その、すまんつ。」

「今度からやらないでくれよ。お前が傷つくなんて見たくないからな・・・」

俺はそつと、手を簾の頭に乗せ撫でながら言つた。

「／＼／＼、一夏よーみ、皆が居ないからと云つて・・・・し、失礼するぞー!」

簾は手を払い、保健室を出ていった。

そんなに嫌わなくとも良いじゃん・

「あ、ヤバイ。眠氣が・・・」

いきなりきた睡魔に俺はやられ、寝てしまった。

なんだ？なんだか口に違和感が有るぞ？てか、何時間寝てたんだ…
・
・
・
・
・

「…………一夏…………」

「…………ん？鈴か？」

「つー？」

俺を呼ぶ声でわかつたのだが、鈴よ。なぜキスなどしたんだ。

「…………鈴さんや。なぜキスなどされたのですか？」

「ち、違つわよ…た、ただ躊躇ちやつて当たつただけよ…事故よ
！」

鈴は手をあわあわさせ、顔を赤面させて後ろに引いていた。

「まあ、キス位だったら気にしないよ。ノーカンノーカン。」

「や、そりやね！…………アイツが、羽富が現れたね…………」

鈴はまだ赤面のままだが、声は真剣のようだ。

「・・・・大丈夫だ。中学の頃のよひとは、行かねえよ。もう雀には負けねえよ」

「私、怖いよ。一夏がまた、アレ、になつたりしたら・・・一夏が、アレ、に為つたら誰も止められないし、下手すれば一夏も、世界も壊れちやうし・・・・・」

「だから俺は鍛練を怠らなかつた。もひ、アレにならない為に、それに守るもんも増えちまつたしな」

「守る物つて?」

鈴が問い合わせてきた。

そう、「」の学園に来てからまた増えちまつたしな・・・・・

「俺の周りの、世界。お前や、千冬姉、幕に、セシリ亞。後は五反田とかかな? 何も世界を守らうなんて思つちやいねえ。俺は俺の世界、しか守らなこよ」

「・・・・一夏は変わらなこよね。けど、そここの話が忘れてるんだと思つよ。」

そつかい、と相づけをで返すと鈴はぐつと回つて出口に歩き始めた。

「じゃあ、元気そうだし私は帰るからね？」

「ああ、・・・・・鈴、絶対に手え出すなよ・・・」

「それせひの台詞よー夏・・・」

「「アイツとの決着を着けるのは俺、私、だからなあーー！」」

そういうと鈴はそのまま保健室を出ていった。

それから少しして、篠がきてチャーハンをいじ馳走してくれた。

だが、調理行程に問題があつたのか味が無かつたが、思つてみれば俺、何も食つてなかつたじやん・・・

て、事で、チャーハンを搔つ込む。時間にして1分位だろう。

その後、篠と他愛ない会話をしていたら保健室のドアが開いた。

「あのおー、織斑くん、筱ノ之さん居ますか？」

僕らの副担、山田先生だった。

「どうしたんですか先生？」

「あ、居ましたか。少し吉報が有りますよー。」

どうやら、先生と言ひ單語に打たれたのか山田先生は胸を張りながら擬音に『えっへん！』と付きそうなポーズを取っている。

先生！、服のボタンが悲鳴を上げておりますーーー！

「引っ越しです」

「…………へ？」

篇よ、女子がそんなすつとんきょうな声を出すもんじやないが。

「先生、主語を入れてください。」

「ああ、そうでしたね。やつと部屋調整が終了したので筱之乃さんは引っ越しですか」

「…………」

「良かつたじやねえか、男と同じ部屋なんて不便だつたら？」

「良かつたじやねえか、男と同じ部屋なんて不便だつたら？」

「……一夏は私に居てほしくないのか……？」

「いや、居てほしいも何も学校が決めたんだからそつなるだつよ？」

？」

「うこうと篠は立ち上がり。

「山田先生、引っ越し、今すぐしましょ？」

「え、ええ、別に今すぐでなくとも良いですよ？用意があるのなら明日ででも……」

「いいえ、今日で良いんです。……じゃないと離れられなく……」

最後の方に何か呟いていたが俺には聞こえなかつた。

すると篠は「うちを向き、指をこちらに向ける。

「一夏よー」で約束して欲しい

「なんだよ・・・」

「学年別大会、私が優勝したら

」

「 私と、付き合つて貰うぞ／＼／＼

その時の筈の顔は赤らんでいたが堂々としていた。

どうも、最近パチプロ風雲録なるゲームのヒロインの死に涙腺が崩壊したマイペースですたい（、：：）

いやあ、桂馬くんは良いことを言つたよ、「物語の進行や薄いシリオの為にヒロインを殺すな！ロードだロードだ！！」まったくですたい。

ヒロインが死ぬゲームが多いゲームをやると気分がブルーになりますか？

例えば、カオスヘッド、月姫、パワポケ、恋姫などなど。

そんなこんなで今回も始まるわけで『ざいます』が、『こ』で注意を一言、今回の話には『ガンダム』を知つてないと解らないネタが冒頭にふんだんにあしらわれています。『ご注意をしてください』。

感想や、『』意見、不満やアドバイス等があれば気軽に書いていてください。

では、MY PACE WORLD テイク オフ！！

ドキッ？男子一人（？）だらけの女子校日録！　一夏・・・それは僕も含む

六月頭、日曜日。

俺は久々にエス学園の外、てか、五反田の家に居た。

「で？・・・・・」

「で？つて何がだよ？」

まあ只今対戦ゲームをしているんだが、こいつは弱いくせに強いキャラを探すのは上手いから嫌だよな・・・・

「一夏よー凄いよー」のターンX凄いよー！

「黙れエセ侍！貴様をガン○ムなどとは認めないぞ！」

因みにやっているゲームは主オススメの「ガン○ム+クス○リームバーサス」。通称「エクバ」なんだがな・・・・。

五反田がターンX、俺がOO。いや、本当に家庭用になつてよか

つたよ。

「てか、話は戻すが女の園の話だよ。良い思いしてるんだろ?」

「…………してねえよ。どちらかと言つと道連れが欲しいくらいだ。

」

まつたくである。寮の廊下をあんなに服がバージしていく田のやり場に困るつてモンじやねえ。

「つか、鈴が転向してくれて良かつた。本音を打ち明けられる奴が少なかつたからなあ」

「ああ、鈴か。鈴ねえ……」

「うん? 五反田やつじつしたんだ? にやけやがつて。気持ち悪いな……

「…………アーリンザム…………はい勝ち…………」

「ちょっと一夏、ライザーで粒子化してからの格闘はねえだろ!」

因みにこのゲームは発売一週間で百万本セールスを記録している。需要は男性全般と適性検査が低かつた女性に売れていった。

「やあ、せつかりさん強いわ。さて、次は赤枠でも使つかな？」

「たまには別の機体使えよ！東方不敗を使えば？」

「あんな厨機体使えるか！お前はジダで汚い花火でも上げてみよ？」
この作品の機体をベースに作られたE.Sも少ないながらも有るのだから悔れないよな。

「で、話は戻るが、鈴のことは？」

「ちよつと弾一お皿出来たつて言つてるんだけどー。」

と、ドアを開けたのは五反田の母親、五反田蓮さんだ。

どう考へても年齢と外見が合つてない。本人曰く『一八から歳をとつてない』らしい。

「あら、一夏くん来てたの？いらっしゃい。」

「お邪魔してます。」

「ああ、ごめん。すぐ下行くわ。」

「わかつたわよ、その前に一夏くん、『蘭』に挨拶して行ってね。」

「分かっております。」

「一夏、ゲームは俺が~~アリ~~しておべから、『蘭』に挨拶しに行けよ?」

さつきまで楽しそうな笑顔だったのに、いきなり弾の顔は沈んでいる笑顔になつた。

「サンキューな。」

俺は弾の部屋を出で、蘭ちゃんの部屋に行つた。

蘭ちゃんの部屋はホココ一見当たらぬ位に片付いていたのだが、家具は机に、本棚、ベッドと

立派な仏壇しかない。

「蘭ちゃんなんね。入学したら直ぐに報告に来よつと思つてたんだけど色々忙しくて……」

俺は仏壇の前で正座をし、線香に火を付け、合掌しながら行つた。

発病したのはちょうど一年位前だ。蘭ちゃんは急性の心臓病で発病から一ヶ月もせずに死んでしまつた。

「多分、今度来れるのも夏休みの頃かと思つけど、そん時には楽しい土産品や土産話、用意して来るから待つててな」

俺は立ち上がり下の階に行つた。

その日、馳走になつた定食は泣けるほど美味かつた。

「……やつぱり特格からステ入れて覚醒技の方がダメは入るかな?」

「黙つて飯を食べ、厳さんに殺されるぞ。」

「飯は黙つて食えよ!」

「やつぱりハヅキ社製のがいいなあ

「え？ そう？ ハヅキのつてデザだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの…」

「私は性能的にミュー・レイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」「あー、あれね。物は良いけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子がわいわいつゝ賑やかに談笑していた。みんなが手にカタログを持つている。

「そついえばおりむーのHISースツつてどこのお？ 見たことないんだよ。」

「あー・・・特注品だよ。サイズとかを男子に呟わせたりしたから原型は無いが、もとはイギリッド社のストレートアームモデルだ。」

実は嘘で、作ってくれたのは、白式の制作者の束さんである。

束さんいわく「核かライザーソード位でしか傷を付けられないよお？」「らしい。

「HISースツは肌表面の微弱な電位差を検知して、操縦者の動きを

ダイレクトに各部位へと伝達、ヒュサニで必要な動きを行います。

俺たちの会話に入ってきた博識先生、山田先生はこれまで、凶器を張りながらすらすらと説明しながら現れた。

先生よ、胸を張りながら言わなくても……ほら、クラスの、無い組がショボーンしてますたい。

山ちゃん詳しい!、山ペー見直した!等のあだ名が飛びかう。山田先生には今幾つかの愛称があるが、教師、しかも副担任をあだ名で呼ぶとは、千冬姉にやつたら……やつてみるか……

「諸君、おはよう」

「お、おはよひらいります!」

皇帝さんがログインしますた。

それまで席を立っていた奴らや、騒つていた連中が一斉に千冬姉に挨拶をした。

「……あ、昨日出したスーツ着てくれたんだ千冬姉「学校では織斑教諭と呼べ織斑」ヘヴン!!!!」

あ、朝から出席簿アタックはキツいです。

ちくせう、今度家の状況、クラスの千冬姉愚民教の奴等に教えてや
るうか・・・ビール缶の山とか下着の山とか・・・まったく、しば
らく帰らない内にあんなに貯めやがって。

昨日俺が洗濯し無かつたら多分、今週持たなかつたぞ。

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがIS
を使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のI
Sステップが届くまで学校指定のものを使うので忘れないようにな。」

因みに忘れたら水着（スク水、ここの重要！）もしくは下着になるら
しい。

まったくこの学園は男の俺には優しくない。もしも授業中なのに下
着姿の同級生が居たらと思つと・・・どうしよう。

想像だと、見た瞬間セシリ亞に射撃されて、箸に大根切りを食らい、
鈴に刀でウニにされた後、言い出しつべの千冬姉に地べたと変わり
なくされるビジョンがうかんでくるぞ・・・やべ、冷や汗止まん
ねえ！

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はこつ」

山田先生、そんなに慌てなくとも誰も怒りませんで。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介しますー・しかも一々名ですー」

「え・・・・・」

「　「　「えええええっー・?..」」」

転校生が来るとクラスが騒ぐのは古今東西、小中高どーでも変わらなこよつ、只今うちのクラスは騒いだ。

(けじおかしいな、一一名転校生がいるなら普通は分けるはず、しか
もこのクラスに・・・なんか裏有りか?千冬姉じやないと手に負
えない輩か俺田当ひの企業の差し金か・・・)

ガラガラ

そう思考していたら教室のドアが開いた。

「失礼します」

「・・・・・・・・・・」

クラスに入ってきた一名を見てみんながみんな目を開いた。

「シャルル・デュノアです。フランスからきました。この国では不慣れなことも多いかと思いますがみなさんよろしくお願いします」

正直俺も驚いた、なんだつてその内の一人が、男子だつたんだから。

ドキッ？男子一人（？）だらけの女子校日録！　一夏・・・それは僕も含む

五反田め、一夏に厨機体のマスターなんて勧めやがつて、死ぬき満々じやねえか。

この前地元のゲーセンに行つたら中佐のマスターが13連勝していだが。おー怖い怖い！！

どうしようかなあ、千冬姉のエス、『スサノオ』にしようかなあ？

千冬姉が仮面付けながら「私には免許が有るといった！！」とか「私の無理で・・・」じじ開ける！！」とか！・・・有りだな＝^・・・
^ =

そろそろ機体説明しないと……作者が死ぬ……

てな訳で機体説明しま

電車の中とは暇なものだ。どうも、試験で早くかえれるからウハウハしてるマイペースです。

え？世界史？数学？知らない知らない（・・・）ノシ

今からゲーセン行つてきます！――！

そろそろ機体説明しないと……作者が死ぬ……てな訳で機体説明しま

白式

本当は某企業が作る筈だったが束がその企業に武力介入をし、コアを奪い、千冬のもと愛機・暮桜のコアとミックスして容量が一倍になつたチート機体。

能力は、右手に触れたもののエネルギーを奪い自分のエネルギーに変換する。

だが、能力が能力な為に半分以上の容量を食つてしまつ。

因みに後付けの装備は付けられない。その代わり一夏の幅広いネタ技と一夏自体のスペックによつて武装がなくても専用機持ち程度なら倒せる。

ワンオファビリティーは『風林火山』。これも容量の半分をしめている。つまり、『右手の能力』と『風林火山』に容量を食われている訳だ。

今現在出ているのは火の『紅赤朱』。これは機体に高熱を帯びさせる単純な能力。

ただ、温度は『摂氏2000』であり、触れたら機体はおひか、相手の人体にも影響がある。

おまけに機体の色が白から赤色に変色する。

他の能力は後々シナリオでお楽しみください。

甲龍

はい、原作無視です。原作レイプです。後悔はしている、だが反省はしない。

原作の連結刀と衝撃砲は無くなり、某慢心王のような戦い方である。

登録されているなら古今東西どんな武器でも出てくる。つまり、登録すればセシリ亞の『スタートライト』でも出せる。

だけど通常は普通の刀や機関銃等を出ししている。どうしてかと言うと、鈴の使用する『暗器方』で使用するものの方が使いやすいからである。

刀剣の一つ一つが所謂データの塊であり、使つたびに甲龍の容量が軽くなつていき、最終的には神速の域に達する。なんだかめだかボ

ツクスの宗像くん見たいですね。

ワンオフアビリティーはまだ出でないが一応は出せる。

そんな受験じゃないんだからパンパン叩かれたくないよな

一夏? アン

リハビリに取り敢えず一話投稿します。

長いブランクがあった事をお詫び申し上げます。

そんな受験じゃないんだからパンパン叩かれたくないよな

一夏？アント

「お、男…………？」

誰かが呟いた。皆が肩をわなわなさせている。……それで、耳を塞ぐ準備を……

「はー。じつらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「

まるつきり童顔。髪は遊んだのとは違い純粋な金髪。体は華奢に見える。

・・・・・これだけ見ると・・・・全国の男どもは祭り上げるだらうな。

「ああ・・・・・」

「はーっ！」

「あああああああ

！

やつぱりかああああーーー

くそつー耳をふさごでるつてのにて鼓膜に響きやがる。ここつり全員
波紋でも使えるんじやねえのかーーー！

「男子ーー一人目の男子ーー」

「しかもうつむきのクラスーー！」

「美形ー童顔ーショタ系ーー！」

「私を産んでくれてありがとうお母さんーー！」

皆が皆（一部をのぞく）「ロロンビア・・・もとい歓声や天に拝んでいたり・・・・ヤバイ、このクラスこわい。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬姉が頭をポリポリ搔きながら言つた。まあ、千冬姉は余りこいつの好きじゃないからな。学生の時も普通の女子とからまなかつたからな。

「み、皆さとお静かに。まだ自己紹介が終わつてしませんからーー！」

山田先生が困った顔をしながら頬をふくらと膨らませるとこいつ、高等テクを披露しながら皆に注意した。

まったく、本当に山田先生はどいままで俺たち男のツボを刺激するん

ですか！！

・・・・まあ、先生の言つ通り転校生は、一人、では無かつた。

輝くような銀髪。ともすれば白にちかいそれを、腰近くまで長くおろしている。きれいではあるが整えている風はなく、ただ伸ばしつぱなしといつ印象のそれ。そして左目に「」注目。

眼帯であります。

しかも白の医療用の奴ではなく、蛇ボスが付けているような黒眼帯。

(・・・・あいやー、ありや軍人だな。)

見るからに軍人であるだろう。教室に入つてくるときの足の歩幅、そして無音の足音。多分、相当の訓練積んでるだろう。

「・・・・・・・・

・・・・千冬姉の事を穴があかんとばかりに見つめている。

「・・・・・挨拶をしろ、ラウラ

「はい、教官」

・・・・おーおい、千冬姉を教官つて言つたりとは・・・・こいつ、
ドイツか・・・

千冬姉はとある理由で一年程ドイツで軍隊教官として働いていたことがある。

俺も知つたのは学園に入学してからだけだ・・・

「こいではそつ呼ぶな。もう私は教官ではないし、こいではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

うへん？見るからにラウラは千冬姉の事に訓練をされたのかな？ラウラの眼差しから見える光は千冬姉を尊敬、または崇拜等の目で見てるからな。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・・

おこおい、その血口紹介は面接で『特にあります』って答える位にやつちやいけない事だぞーーー！

「あ、あの、以上……ですか？」

山田先生がラウラに聞く。流石山田先生だ。出来る限りの笑顔で聞いているが、ラウラの雰囲気のまれて額から漫画みたいな汗、出でますよ。

「以上だ」

あああ、言わんといひや無いよー。山田先生の涙腺が今にも決壊しそうだよ。

そんなで、俺がラウラを見ていたら、視線が逢った。

「……貴様がーーー！」

「ひつにすかずかと歩んでくるラウラ。

田にはなんだか怒りが見えるけど、俺、なんかしたつけな？

そしてラウラとの距離が30センチ程になつたら、ラウラは右手を

振りかぶっていた。

ああ、平手打ちが飛んでくるのか……。

そう『理解』出来れば後は簡単だ。

迫つてくる右手を左手で受けとめ、ポケットに入ったココアシガーレットを右手で取り出し、それを指で弾く。

パスンツ！

「……！」

ラウラは驚いていた。当たり前だ。何故ならココアシガーレットは眼帯を、眼帯の紐を打ち抜いていた。

つまり今は左目に何も付けていないことになっているのだが……。

「成る程、『境界の瞳』か……まさか本当にいやがったのか……」

俺のセリフにラウラは驚いているのだが、右手を振りほどき左手で

田を隠し———

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか！」

「あー・・・・」ゴホンゴホン——ではHRを終わる。各人はすぐにきがえて第二グラウンドに集合。今日は一組と合同でES模擬戦闘を行つ。解散！』

野原ひろしまたいな父親を持ちたて一夏です。子供たちが何を書いたかばかりでなく、

ここに記載するベースです。(。・。・。)

最近、一番くじあるが参加したので引いてきたのですが、自分が当たったのがA賞のクッシュン。

友達に血邊じよひしたら友達からメールが。

『一番くじ、A賞の田録切たつた(ドヤアアア)』

・・・久しぶりに友達を殺したくなりましたね。

PS、書き方かえてみました。状況や心理描写少なめの単語多めに作ってみました。

PS(プレイステーションじゃ無いからな?)

ネギまのSS書いてみました。お暇でしたら読んでいいください。
弟との合作なので自信は・・・。

野原ひろしみたいな父親を持ちたい一夏です 子供に生きるって言つからぢ

「A班は後ろに回り込んでB班は右舷を叩け」

「…………」

「い、一夏・・・・もう僕、転向したいよ・・・」

「シャル、俺もそつ田づよ・・・・」

現在おれらはリアル逃走中をやつてているのだが、俺は慣れているのだが、シャルは少しばかり・・・ガンガン引いている。

・・・・・やつぱりな・・・・やつぱリシャルルの走り方を見る

そしてアリーナに設置されている更衣室に着いた俺たちだったのだ
が・・・。

「あれ？一夏は着替えないの？」

「ああ、着替えないよ。てか着替えられないだりつよ、女子、が居るの元よ。」

「…………ど、何処にお、女の子が居るの一夏……」

シャルルよ、冷や汗がダラダラだし、田まで泳いでいるぞ？

「残念ながら俺の目の前に居るぞ？」

「…………一夏はいつも気がついたの…………」

「最初は体つきかな？シャルルの体つきは男性のそれじゃなくて、女子のそれに近いし。それに指とかも細さが女子並に細いしな？」

「…………あ、あはは。凄いね一夏は…………そんな事ならグローブとか着ければ良かつたかな？」

ひきつった笑顔を浮かべながらシャルルは言っている。

その笑顔は何処かしら何かの束縛から解放されたような表情を浮か

べていた。

「なんで女の子のシャルルが男装なんかしてまで……って、まあ予想は出来るけどな。・・・俺の事を調べてこいつて言われたんだろう？」

「ははっ。一夏はなんでも知ってるね？・・・そうだよ。命令されたんだ。父に・・・一夏の情報を取つてこいつて・・・」

「確かにシャルルの父をもつて言つた『テュノア社の社長だろ？』

「そり。那人から直接の命令なんだ。」

「けどよ、そんな命令なんか断れば良かつたじゃねえか？なんで子供のシャルルに」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

「・・・・・・・・・・」

俺は静かに。そう静かに拳を握りしめた。力が強すぎて血が出てき

ているが俺は無視をした。

「引き取られたのが一年前かな？ちょうじお母さんが亡くなつたときには、父の部下がやつてきたの。それで色々検査をする過程でI-s適応が高いことがわかつて、非公式ではあつたけど、デュノア社のテストパイロットをやることになつた」「もついい、泣きながら言うのなら、言わなくていい」！――！

俺はシャルルを抱き締めた。そう、シャルルは泣きながらも言つてくれたのだ。だが、それでも健気に自分の言いたくない事を言つてくれたのだ。

「大丈夫だ。デュノア社の事なら俺も知つてる。経営難になつてることも。政府から資金提供が亡くなりそつなのも・・・」

「・・・よく、しつてるね・・・」

「だからのお前といつマスクで売りに来たのも・・・」

「・・・ああ、なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとう一夏。」

シャルルは俺から離れて頭をさげた。さつきまで泣いていたのでやっぱり目元は腫れていて、目が充血していた。

「で、シャルルはこれからどうするんだ？」

「 そうだね、一夏にばれちやつたし、きっと僕は本国に強制送還され
て牢屋入りか、他の企業に入れられるか・・・まあ、僕にはどう
でもいいかな。」

「・・・・・シャルル。」

「何？」
——夏——

「自由になりたくないか？」

「あはは。僕には最初から自由なんて無いんだよ。」

「だったら俺が自由を作つてやるよ。」

そう言い俺は着替えずにアリーナに入つていった。

「むう。こり織斑！遅刻だぞ！しかもスーツを着てこないなんて一
体どういつて見だ！」

アリーナに出ると千冬姉に見つかった。

だが俺は千冬姉を無視し、エスを展開させた。

「……い、一夏よびつけたのだ！？」

千冬姉よ、一夏って言つちや不味いだろ？

「千冬姉、夕方くらいになつたら帰るから

「ど、何処に行つてくれるの？」

「なあに、ちょっとくらフランスに行つてくるだけだよ。」

そういう、俺はブースターを噴かしながら。

「ワンオフ・アビリティー！『風』『疾風迅雷』

ワンオフ・アビリティーを発動すると俺のエス、『白式』は薄い翠

色になり、白い、天使のような翼が生えてきた。

因みに『疾風迅雷』の能力はごく簡単なモノである。

ティウン。

俺はその場から音速を超し、『光速』で姿を消した。

行く先はフランス。デュノア社。

な、何者だ貴様はっ！　はつ！テメHの娘のダチ公だよバカ野郎　（前書き）

・・・・・（。・・・・）

ま、まわかこじなことになるとは（。・・・・）

寝不足とはこえ、こんな出来になってしまったことを、公開 はする。、後悔、はしない。

感想やら提案、はたまたネタワザ等を募集中でござります。

どうぞおくれでござります＝^・・・^＝。

な、何者だ貴様はつ！ はつ！ テメヒの娘のダチ公だよバカ野郎

一夏SIDE

翔ぶ事20秒でフランス。しかも目の前には「テカイビル」「テュノア社」とデカデカと書いてあるビルの前に来ている。

つて、着いたのは良いのだが・・・

『そここの未確認IS！直ちに制止し、投降しなさい。』

どうやらこのテュノア社の警備工らに囲まれているらしい。

てかーざつと見ただけでも50機は有ったぞー？ どんだけ警備態勢順調なんだよ！？

「え、ええっと、皆さん、俺はこここの社長さんに用があるんですけど・・・」

「さつ？何言つてゐんだ貴様は？貴様のよつな怪しきものを社長に
合わせる駅にはいかんな！」

「あら？ やつぱり？」

警告 敵HISにロロックされていります。・・・・・・50機程から

IISからアラートにびつつく暇なくいきなり囲んでいNHS
全機からのマシンガンの雨。

因みに相手さんが使つてゐるHISは『テコノア社が量産している『
ファーレ・リヴァイブ』である。

「ほい。はつと。よつこじしょ。」

俺はその弾幕を いつも簡単に避ける。避ける。避ける。避ける。
避ける。避ける。避ける。避ける。

「へつへつおー何故当たらないのだー！」

いや、何故と言われましても。実際まだ『疾風迅雷』を発動してい
る状態だから避けるのに苦は無い。てか、実際手加減、いや足加減

をしているから速さはまだ動体視力に映る程度で止めている。

本気を出したら視認はもちろん、ISのハイパーセンサーすら出来なくなってしまう。

「次はこっちから行かせてもらひやー！」

俺がやる事は 殴る。

しかしだだの殴りと侮ることなかれ！

『疾風迅雷』の速度で殴られたISがどうなるか・・・。

3分後

「ぐ、クソオ・・・」

「50人の精鋭をたつた一人で・・・」

「てか速すぎよ・・・」

目の前には鉄の山が出来ていた。

勿論全員パイロットは生きてますよ？俺は悪くない人は殺さない主義者なんぞ。

「では、社長室にむかいますか・・・社長室は多分最上階かな?」

俺はＩＳを使ってビルの最上階に突撃した。

社長ＳＩＤＥ

国連からの連絡で未確認のＩＳがこの国、しかもウチの会社に向かっていると聞き、警備網を張り巡らせてみたら見事に掛かつてくれたよ。

しかも連絡によればそのパイロットは世に名を伝めている男性パイロットだ。

何故この会社に来たかは解らないがこれもまた不幸中の幸い！！！

俺は今会議室から自分の社長室に向かいながら。微笑みを隠せずに笑いながらスタッフと社長室にむかっている。

「ハツハツハツ…どうにかして彼を我が社に取り入れればフランス一！いや、世界一のIS制作の会社にだつて出来る！転機は私に向いてきたと言うわけかああ…！」

俺は心の中の声を慮せずに大声を出しながら言つてい。

そして社長室に着いた。

ここにある書類に彼のサインさえ書かせれば私は…私は世界一になれるんだあ！

ギィイ

ドアを開けるとそこには

「Welcome? バカ野郎。」

窓ガラスは割れ、書類は散乱して見るも無惨な社長室に、秘書に四つんばいをさせて、その上に足を組ながら座つて微笑みを浮かべている

悪魔がいた

一夏SIDE

「いやいや、社長さん。遅いですよ？遅すぎて貴方の秘書さん。調教しちゃいましたよ？」

この部屋に窓ガラスから「ダイナミックお邪魔します」を決め込んだ時に、この部屋には秘書があり、非常ボタンを押されそうになつたから少しばかり『調教』をしていたらやつとクソオヤジが来ましたよ。

「き、貴様は！誰なんだ！？」

「俺は貴方の息子、いや娘さんでしたね？そのクラスメイツです。」

「む、娘だと！？・・・まさかあのクソ娘めつ、あんなに言い付

けたのにバレやがったな・・チツ、使えねえ女だ。」

・・・・ほおう・・・・

「テメエ、自分の娘にクソ娘は無いだろ？仮にも自分の娘だろ？」

「カツ！あんなの身体だけの関係のヤツが勝手に孕んで、勝手に産みやがったんだ。ケツ、せつかくだから使ってやろうと思ったのに入学早々にバレやがって・・・」

「・・・・・シャルルをどうするつもりだ？」

「俺はこの塵芥の聞くに耐えない台詞を耐える為に本日一度田の拳を握りしめている為の出血をしている。

「あ？ そうだなあ、とりあえず強制送還はするだろ。・・・・・そうだな、アイツは顔は良いからな。俺の、性玩具、にでもしてやるよ。アイツは俺の言つことは何でも聞いてくれるからなあ！」

“これ”は人間の三大欲求の一つ、“性欲”を彷彿させるような「下衆」のような顔をしながらいやがった・・・

馳目だ・・・・限界だ・・・・

「そんなことより君にいい話があるんだが？ 我が社に入らないかい？ 君に利しかない話なんだよ『ボギンツ』 ボギン・・・・ってええええ！」

田の前の、『』はざわざから身体からあり得ない音がして驚いているのだ。ひづ。

まあ、音の発生源は、“コレ”の両腕の付け根からである。

俺が近付いてきた、『コレ』の両腕の付け根を音速で殴りぬき骨を『粉碎骨折』をさせたのだから。

「・・・・もつ喋るなよ・・・お前の口調にはもつ、家族」を名乗る資格はねえよ。お前は子供を犯すと言つたな？ 本当の親なら子供をベットの上じやなくて、アツトホームなかんじで抱くんだよ・・・

L

「く、クソガキがあああ！知つたような口を聞きやがつてーーー！」

まだ喋るかよ・・・・

「お前の喋る権利を、剥奪する」

カコシン

「 ッ！－！－！」

「どうやら喋りたいようだが、しゃべれなこようだ。」

「それもそのはずだろ。何故かと言つと俺がやつたことは音速で「顎」を殴り抜いた。そしてその微調整で脳の神経を刺激し、会話をする神経を『刺激』した。」

ピッポッパ！

「・・・・・あ？今大丈夫ですか？ちょっとそつちの研究所に被モルモルモアツシテ
検体が一人譲れなんだけど・・・うん、じゃあ料金はいつもの所に入れておいてね。じゃあまた今度。」

「俺は知り合いの『科学者』に連絡をし、この『ガラクタ』をモルモットにしてもらつ予定になつた。」

因みに料金は諭吉〇〇〇枚に相当である。

「ではでは、テュノア社長。自分はこれにて失礼をせてもらつよ。多分『アイツ』は仕事が速いから多分2分くらいでやつてくれると思つよ。」

俺はエスを起動させ、『疾風迅雷』を発動させる。

「あ。一つ言つておくよ。『アイシ』に『実験』じっけんたら、死より恐ろ
しきりしきよ？まあ、頑張つて生き延びろよ？」

ツ ! ! !

「『めんね？おれ、ナメック語は解らないんだ？』」

そういうって俺は、デュノア社を、フランスを出た。

その夜には『デュノア社長謎の失踪！？』なんつうニュースが世界を巡った。

さあ選べ！妹か囚人か！はたまた妹か妹か妹か妹か妹か！一夏が・・・お

み、みじかい（へ・）

まあ、予定的にもこんがらいの予定だつたし良いかなあ？

まあ、これから設定期に問題は有りそうだがそんなの知ったこと
かつ！

感想やら提案、はたまたネタワザ等を募集中でござます。

さあ選べ！妹か囚人か！はたまた妹か妹か妹か妹か！ 一夏が・・・お

一夏SIDE

あれから20秒でフランスからE.S学園に着いたのだが・・・・・

「これはこれは授業放棄とはいひ」身分だなあ？織斑？」

校門の目の前に居たのは千冬姉の仮面を被つた修羅であった。

「ち、千冬姉え！？」コレには理由があつてだね！」

「ほお？貴様には私の有難い授業を抜け出してまで遣らなくちゃ行けないことがあつたといつのだな？」

あ～やや・・・笑顔だよ千冬姉・・・死にたくなるような笑顔だよ。

多分これ、怒ってるよ千冬姉・・・。だが！

俺にはお土産が有るんだ！

「ど、どひひですか、千冬姉？」

「なんだ愚弟よ、懺悔ならせんぞ。貴様にはアリーナを300周
走らせるつもりだが？」

「それ死んじゃひでしょー…違ひ違ひよー…？」

俺はポケットから、ある、書類を取り出して、千冬姉に突き付けて
こいつ言い放つた。

「ねえ？千冬姉。妹欲しくない？」

「……………ピッポッパー……………ああ私だ。公安零課か？」

今私の目の前に変態がいる。すぐに来てくれないか？」「

「ちょっと千冬姉っ！？公安零課に連絡つて、本当に殺す気じやな
いのー？とにかくケータイ閉まつて！」

俺は千冬姉からケータイをかすめて閉じると、首には150センチ
は有りそうな刀が当たられていた。

「では、聞かせてもらひつで？貴様は何故そんな事を聞いたのだ？」

凄いよ千冬姉……背中から怒氣でスタンド見たいなものが見えるよ……

「わ、わかったから。説明するから早く刀退けてよー。」

そしてある意味強迫氣味だつたが俺は、シャルルの事を、そしてあの社長の事を話した。

「なるほど、貴様らしい判断だな。だが『実験^{モルモット}』を送つた先が『アイツ』なんだろう？それはいいのか？お前は『アイツ』と関わりたくないだつたんじゃないのか？」

「……まあ、だけど『アイツ』は一応、『笄』の親族だしね？それにシャルルには新しいESを使ってもらつつもりだから、『モルモット』はそれのお礼だよ。まあ、金は貰つてゐるけどね。」

「……ふん。貴様はかわらないな……よし！織斑家の家主としては認めよう。だが、それはちゃんとデュノアに聞いてからだ。」

・・ひやんと説得しりよ。」

「ああ、千冬姉、ありがとう。」

そういうと俺は教室に向かつて走りだした。

走ること約5分後

現在の時刻は昼休みのため廊下にはちらほら生徒がいて、色々と鬼ごっこがあつたが、やつこさせ教室に着いた。

ガラララッ！

ドアを開けると一メートル先にある机にシャルルがいた。

「シャルル！話があるんだ！早く来てくれ。」

「えつ？い、一夏・・・な、何かなあ？つてええええ！？」

俺がスタッタとシャルルに近寄り腕を掴み、教室の外に出た。

そして早足で一分ほど移動し、現在地は屋上。

「ハアハアハア・・・・い、一夏あ・・・い、いきなりビリしたんだい？」

シャルルは早歩きで屋上に向かつたため息を整えていた。

「シャルル。お前の親父さんさりげなまで呟つてきた。」

俺はさりげなまでのフランスでの出来事をシャルルに話した。

「・・・は、ハツハツ。父さんはやつぱり僕の事を道具としてしか見てなかつたんだね・・・・」

最初はやつぱり頭に入らなかつたが、徐々に整理が出来つつあるシヤルルは理解してきて、苦笑を漏らしている。

「すまん。勝手に真似だとは解つてはいるが、俺はどうやら口より先に手が出るタイプなんだな。」

「ううん、一夏は悪くないよ。むしろ感謝したいよ。僕を束縛から解放してくれたんだから・・・。けど、これからどうしようつかな? 帰る所が無くなっちゃつたよ・・・・」

シャルルは笑いながら言つた。

「……そこでシャルルに提案があるんだけど……」

「ん? 何? 一夏?」

「お前はこのままフランスに戻つたら、多分『性別を偽つた罪』で刑務所に入れられるかもしない……」

「……うん。大丈夫だよ一夏。そんぐらいだつたら覚悟は出来てるから。」

「そこでシャルルには提案があるん。」

俺はポケットから書類を取り出して、シャルルに突き付けてこう言い放つた。

「シャルル。俺の妹になれ。」

俺って言つたじゃん。妹が欲しつつて……最高ですか……

やひりか、転校

とりあえず謝らせて下さー。すみませんでした。

前々回の警備工事の件で「50機」は多いだろ。といふ指摘を貰いました。自分的には一夏の『疾風迅雷』を際立たせる為の演出なのですが、皆様が不愉快に思われていらっしゃるのなら修正を加えたいと思います。

こんな駄文まみれの作品ですが、楽しんでいただけのなら本望です。

では、短いですがお楽しみください。

俺って言ったじゃん。妹が欲しいって……最高です……

、せりか、転校

「…………一つ聞いていい、一夏。」

「なんだシャルル？」

俺の「妹になれ」宣言から早20秒。最初は顔が百面相していたシヤルルだったが、どうやら頭が整理を完了したようだ。

「僕が一夏に会ったのって今日が初めてだよね？」

「そうだな。今日の、朝のホームルームで会ったのが初めてだな。」

「そんな初めて会ったばかりの他人になんで一夏はそこまでやってくれたの？」

シャルルSIDE

僕がそう、当たり前の事を聞くと、一夏は「へ普通に、当た
り前」の様に。

「他人を助けるのに理由や意味、関係が必要なのか？」

・・・・は、ハハツ、それはね一夏。皆が思つてゐる事だよ一夏。
だけどね、皆が出来ない事なんだよ。

「それにシャルルの話なんか聞いちまつたら身体が勝手に動いちまつてな。女の子を泣かせたのに動かないのは他人やら初対面以前に『人間、じや無いんだよ。』

「まあ、詰まる話。家族に成つちまえよシャルル。俺たち家族はシヤルルを歓迎するぞ。」

一夏が、家族、に見せるような笑顔を僕に向けてきた。

ズルいよ一夏。そんな顔をされて断つたら僕も、人間、じや無くなるじゃないか。

「ほ、本当にいいの僕が家族になつても・・・僕みたいな愛人の娘でも、一夏や織斑先生の事を家族だと思つても・・・」

どうやら僕は泣いてる様だ。初めて母さん以外に、家族だと、扱われたのが、嬉しいんだ。

「シャルル。これだけは覚えておけよ。シャルルが、愛人の娘、だろ？」「デュノア社の娘、だろ？」「それはただの、添え物、なんだよ。俺はシャルルは、シャルル、しか見てないんだよ。」

一夏僕の肩を掴んで真面目な顔をしながら、真剣な声色で言つてきた。

「解らないんだつたら何べんでも言つてやるよシャルル。『シャルル、俺の家族になりやがれ。』

さつきの真剣な顔が一瞬で崩れさり一夏の顔は笑顔一色になつた。

ああ、駄目だよ一夏。そんな顔されたら

「…………うん。ありがとう一夏…………ううん、一兄い…………」

兄妹なのに好きに、愛したくなつちゃつたじやん……。

一夏SIDE

その後にシャルルが泣き止むまでも、俺たちは取り敢えず職員室に向かった。

職員室に向うときにはシャルルが腕に抱きついてきたのだが……はは、シャルルはどうももつ、兄妹愛に田覚めたんだな。

そして職員室に着き、千冬姉に報告をすると。

「どうか、デュノアよ……いや、シャルル。これからは姉妹として何でも頼つてくれ。」

「はい。千冬お姉ちゃん」

ブシャヤヤヤア！！

鼻血に溺れている千冬姉がいた。

翌日、朝のホームルームにシャルロット（昨日実名を教えてもらつた）は居なかつた。

先ほど食堂で「先に行つて」つと並んで、どこかに行つてしまつた。

まったく、我が妹は何處に言つてしまつたのだろうか。

あれから妹萌えに走り続いている千冬姉が怖くなるのはまた後の話である。

「え、ええ、み、歸れど。おせぬいじれこまか。」

教室にやつれた？感じの山田先生が入ってきた。

「・・・え、えーと、誰かに報告があります・・・転校生が来ました。」

また、ボーデヴィッシュと同じ訳有りか？

皆も頭が着いてきたのか騒ぎ始めている。

「では、入ってきた下さい」

「失礼します。」

ドアを開けて返事をしたのは、朝食堂で別れた。昨日俺の目の前で泣いた。昨日家族になつた。

「織斑^{おりはな}シャルロットです。畠さん。改めてよろしくお願ひします。」

ミニースカを履いてペコっと頭を下げて挨拶してるのは、我が織斑家の妹、シャルロットだった。

「ええーと、どうやらアーノア・・・織斑くんは実は織斑さんだつたって事なんです。はあ、また部屋割り決めないと、いやー・シャルロットちゃんと織斑くんは家族なんだから同じ部屋でも良いくねー!」

どうやら山田先生がやつれたのは、部屋割り、を考えるのが嫌だからなのだろう。

「やつだ。僕から話すことあります。」

そういうとシャルロットは教卓の方から机に向かってくる。

そして俺の座席の前で立ち止まる。

「僕から家族を、一夏を盗つたら黙だからね。だから『マーリングをせてもらひつよ。』

そういうとシャルロットは俺の両頬を両手で包み込み

「愛してこくよー兄い・・・チユ・・・」

「……！」

俺はシャルロットにキスされた。

とりあえず言わせてくれ。柔らかかった。以上。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9822s/>

IS インフィニット・ストラトス -武装を持たないISと気に入らない目付き-

2011年8月19日07時06分発行